

家庭教育支援チームの在り方に関する検討委員会（第3回）
議事次第

- 1 日時 平成26年1月29日（水）9：30～12：00
- 2 場所 文部科学省 17F1会議室（東館17階）
- 3 議題 「家庭教育支援チームの在り方について」
- 4 議事次第
 - （1）人材養成の取組についての事例発表
 - 西郷委員（「人材養成」の取組について）
 - 松田委員（「人材認証制度」の取組について）
 - 山野委員（「人材養成」の取組について）
 - （2）討議
- 5 配付資料
 - 資料1 第2回検討委員会議事概要
 - 資料2 西郷委員発表資料
 - 資料3 松田委員発表資料
 - 資料4 山野委員発表資料
 - 資料5 家庭教育支援チームの在り方についての論点（案）
 - 資料6 家庭教育支援チームの在り方についての論点（案）参考資料
 - 資料7 第4回検討委員会の開催日程（案）について

机上配布

- ・検討委員会配付資料(ドッジファイル)
- ・報告書 つながりが創る豊かな家庭教育
- ・教育振興基本計画
- ・パンフレット

家庭教育支援チームの在り方に関する検討委員会（第 2 回）議事概要

1 日時

平成 25 年 12 月 2 日（月曜日）9 時 30 分～12 時 00 分

2 場所

文部科学省生涯学習政策局会議室

3 委員出席者（敬称略）

川口厚之、菊池まり、西郷泰之、鈴木みゆき、松浦善満、松田恵示、水野達朗、向井説行、山野則子

4 文部科学省出席者

藤江男女共同参画学習課長、坂本家庭教育支援室長、西村家庭教育支援室室長補佐

5 議事概要

- (1) 家庭教育支援チームの取組について、菊池委員より資料 2 に基づいて事例発表。
- (2) 家庭教育支援チームの取組について、川口委員より資料 3 に基づいて事例発表。
- (3) 家庭教育支援チームの取組について、向井委員より資料 4 に基づいて事例発表。
- (4) 事例発表について質疑応答。
- (5) 坂本家庭教育支援室長より、資料 5 について説明の後、討議が行われた。

(委員の主な意見)

家庭が閉じていることで、家庭への支援が難しくなっているのではないかと。単なる孤立ということだけではない要素があるのではないかと。

連携ということについては、複雑な課題などを持っている家庭が増えている。教育委員会だけでも対応できないし、福祉部局だけでも対応できないことがあるので、複雑・多問題といった軸を立てておいた方が後ろにつながりやすいのでは。

学齢期の家庭教育支援はターゲット型に焦点が当てられがちになっていて、就学前の家庭教育支援はユニバーサル型に焦点が当たっている。逆に言うと学齢期のユニバーサル型の家庭教育支援や、就学前のターゲット型の家庭教育支援が、仕組みとしては弱い部分も出てくるといったところを、図の中で活動の種類というような形で考えていく必要がある。

またチームという言葉の定義を明確にしておいたほうがいいのではないかと。チームというのは基本的には独立した人たちが戦略的な目標を共有することでお互い補い合うと

いうこと。一方で、似た言葉でグループという言葉があるが、グループというのは集団形成を行って、共同性を中心に、1人よりも10人でやった方がいいという形。

家庭教育を取り巻く環境が情報過多過ぎる部分もある。これから家庭教育を取り巻く環境というのはインターネットを通じたもの、つまり情報過多の時代が来るのではないかということを見越して、取り入れた方がいいのではないか。

1番のサロン型支援とアウトリーチ支援というのが2本の柱になっているが、図になるとユニバーサル型とターゲット型となっており、うまくつながる表現の方がよい。

地縁・血縁という中間集団がなくなっているので、情報が何のフィルターもかからず個人まで行ってしまうので、中間集団のようなものをサロンで形成したり、様々な支援チームの人との関わりが必要。

またチームにおいて心理学的なアプローチが重視されているが、集団性ということを考えたとき、社会学的な専門家や、あるいは育成の際にも社会学的な研修の内容が強く問われるようになってきているのではないか。

家庭の孤立という問題は、中間集団が小さくなってきているのも事実だが、貧困家庭が増えてきてそういうところはつながりができない。そういう家庭がどうつながれるのかという独自のテーマも出てきているのではないか。チームだけで本当につながっていくのか。

家庭にもチームのニーズはあるが、実は学校にもニーズがある。行政機関がチームを組織する際も、生涯学習担当部局がどれだけ必要性の認識をもてるかというところが難しい。学校に重点を置く方がニーズや、行政的にも近いので、チームとして組織されやすい部分があるのではないか。その方が目的、活動範囲などが明確になりやすい部分もあるのではないか。

我々のチームがターゲットにしているのは、学校からしたら大変だが要対協まではいかないというケース。それから予防的な支援が非常に弱いことが課題。

家庭教育のターゲットは保護者だけではなくて、子供も含むべきではないか。中高生ぐらいになるとキャリア教育に結び付けてやっていくなど、発達段階に応じたチーム支援の中にはキャリア教育との絡みも視点としては1つあるのではないか。

家庭訪問をやっている支援チームの方たちは、訪問して今までつながっていなかった

ところに地域資源をつなげるという役割が基本的にはあるのではないか。

2番の対象範囲で、黄色の部分の表現だが、「関心が薄い・問題を抱える家庭」と書くと、アウトリーチの支援対象はみんな問題を抱えている、大変な家庭だというふうになってしまう。課題とか、ストレスの高いという方が一般的ではないか。

3番との関係では、1つ目は専門家で大きな効果を出すことも多いが、市民の方が同じ目線で支援することで、エンパワーメントするという点では市民の力の方が強いという調査結果もあるので、市民の力をきちんと書き入れた方がいいのではないか。

2つ目が学校とかPTAが行う家庭教育講座は、都市部ではほとんどない反面、民間では様々なプログラムが日本で開発や海外で開発されている。住民は、どのプログラムがどういう効果があるかも分からないので、国が整理するだけでも家庭教育が進むのではないか。

3つ目は、アウトリーチの手法と書いてあるが、家庭を開いて、その家庭で人々が集まるような場をつくるのもアウトリーチになってしまうので、ホームビジットや、ホームビジティングを明白に書き入れた方がいいのではないか。アウトリーチ一般ではなくて、家庭訪問の手法について整理することは大事ではないか。

社会教育の方が場としては近いのかもしれないが、基本的な生活習慣、価値観、自分探しなどが家庭教育の内容にあるとすれば、習い事を通じて、他者との出会いも含めて育まれていく場というのも大きいのではないか。しかし用意できる家庭と用意できない家庭があって、子供たちにとっては、皆がイーブンに接することができない環境になっている。

我々の地域でも子供たちが荒れて大変な時期があったが、一番力になってくれるのは、彼らと接していた少年野球のおじさんたちだったりする。そういう方々が、ふだん接している子供たちに、困ったら教育センター、チームがあるよということを話せるつながりを持ってくることが、地域としてできたらというのが我々の思っているチームの在り方。

我々は、具体的に家庭に支援を届けるような活動というのは少なく、対象範囲というのが分かれずに、混在している状況でいつも接する。そういう状況でチームがどう活動していけるのかが、チームの在り方として私は大変関心があるが、対象があって何をしようというチームの在り方になると、そこら辺が見えないのではと思う。

2番の対象範囲の図は全ての家庭を全部網羅しているという意味ではなく、それぞれの取組がどこに位置付くのかというのが分かると、ボランティアな非専門職集団が自分たちのポジションが明確にわかり、混乱が生じないための図にもなるのではないか。またポジションが分かれば、自身の得意領域に軸を置いて他の領域に行ったり来たりしているということを表現しイメージを組み込めるのではないか。

家庭教育をなぜするのかという点で、分かりやすいのが自立の面や、就学前のヘッドスタートの部分。そこをそろえる役割を家庭教育がより担っていくべきではないか。

各ステージごとにしっかりと学んでいくのが家庭教育で、それによって親としての免許、資格というのを自分の心に持つものと思っている。

行政の支援との関係の在り方で、非常に重篤なものは専門家に任せるが、少し手前ものは家庭教育支援でやろうとか、様々な地域事情や、支援の方針に応じて家庭教育のフェーズが変わっているという支援の多様性や様々な在り方を考えてもいいのではないか。

ヘッドスタートと言うかは別として、富んでいる子供も貧しい子供も、人生の初期に全ての子供が成長発達機会を与えられるということを理念的には書いておいた方がいいのではないか。

連携については、非常に危機的な対応とか、グレーゾーンの事例への連携という意味だけではなくて、メゾレベル的な体制づくり的な連携ということも含めて、1つ立てて整理した方がいいのではないか。

(以上)

資料 2

西郷委員発表資料

ホームビジット(訪問型子育て支援)という新しいアプローチ


ホームスタートとは!?




Home-Start Japan®

ホームスタートの特徴 1

施策のすきま(Niche)に支援できる




地域子育て支援拠点を
利用していない家庭とは
どんな家庭だと思いますか?




ホームスタートの特徴 2

支援方法は「シンプル」




- 地域の子育て経験者が
- 週に1回2時間程度、定期的に家庭を訪問し
- 傾聴と協働する

ボランティア活動



ホームスタートの特徴 3


安心・安全で効果的な支援システム



- 1 支援の「質」を担保する有給のオーガナイザー
- 2 支援の「質」を担保するニーズ把握システム
 - ・ アセスメント・モニタリング・エバリュエーション
- 3 支援の「質」を担保するボランティアへの支援
 - ・ ホームビジター養成講座
 - ・ 申し込みから終了まで7場面での支援

ホームスタートの特徴 4

ホームスタートの効果は高い 89%




ニーズ充足度 詳細集計

ニーズ	0%	20%	40%	60%	80%	100%
孤立感の解消						89%
子育てサービスの利用方法を知る						89%
親自身の心の充実						89%
自己価値や自己肯定感						89%
親の身長の健康						89%
子どもの身長の健康						89%
子どもの心の健康						89%
子どもの健康行動の減少						89%
子どもの成長・発達を促す機会を作る						89%
家族間のイライラの減少						89%
家事の上昇						89%
家族のやり取り						89%
子どもの関心の健康						89%
その他						89%

ホームスタートの特徴 5

全国約60か所の地域で導入



2007/8年 試行後、2009年 スタート

2009年 13ヶ所
2010年 19ヶ所
2011年 29ヶ所
2012年 42ヶ所
2013年 58ヶ所

- 正式スキーム全国21か所
 - 青森県青森市、山形県山形市・新庄市・酒田市、福島県会津坂下町、埼玉県和光市・越谷市・加須市、千葉県浦安市、東京都江東区・新宿区・清瀬市・小金井市、愛知県豊橋市、岐阜県大垣市、徳島県徳島市、大分県豊後大野市、豊後高田市、熊本県熊本市・御船町、宮崎県宮崎市
- プレ・スキーム全国33か所
 - 秋田県能代市・大館市、岩手県平石町、宮城県仙台市、福島県福島市・会津若松市・いわき市・二本松市・喜多方市・白河市・本宮市・猪苗代町、会津美里町、埼玉県吉川市・戸田市、千葉県野田市、東京都葛飾区・西東京市、静岡県南町・伊東市、石川県加賀市、滋賀県彦根市、大阪府熊取町、佐賀県佐賀市、大分県別府市・中津市・日田市・杵築市・宇佐市・竹田市・日田市、熊本県嘉島町、鹿児島県鹿儿岛市

教育支援人材認証制 度に関する事業説明

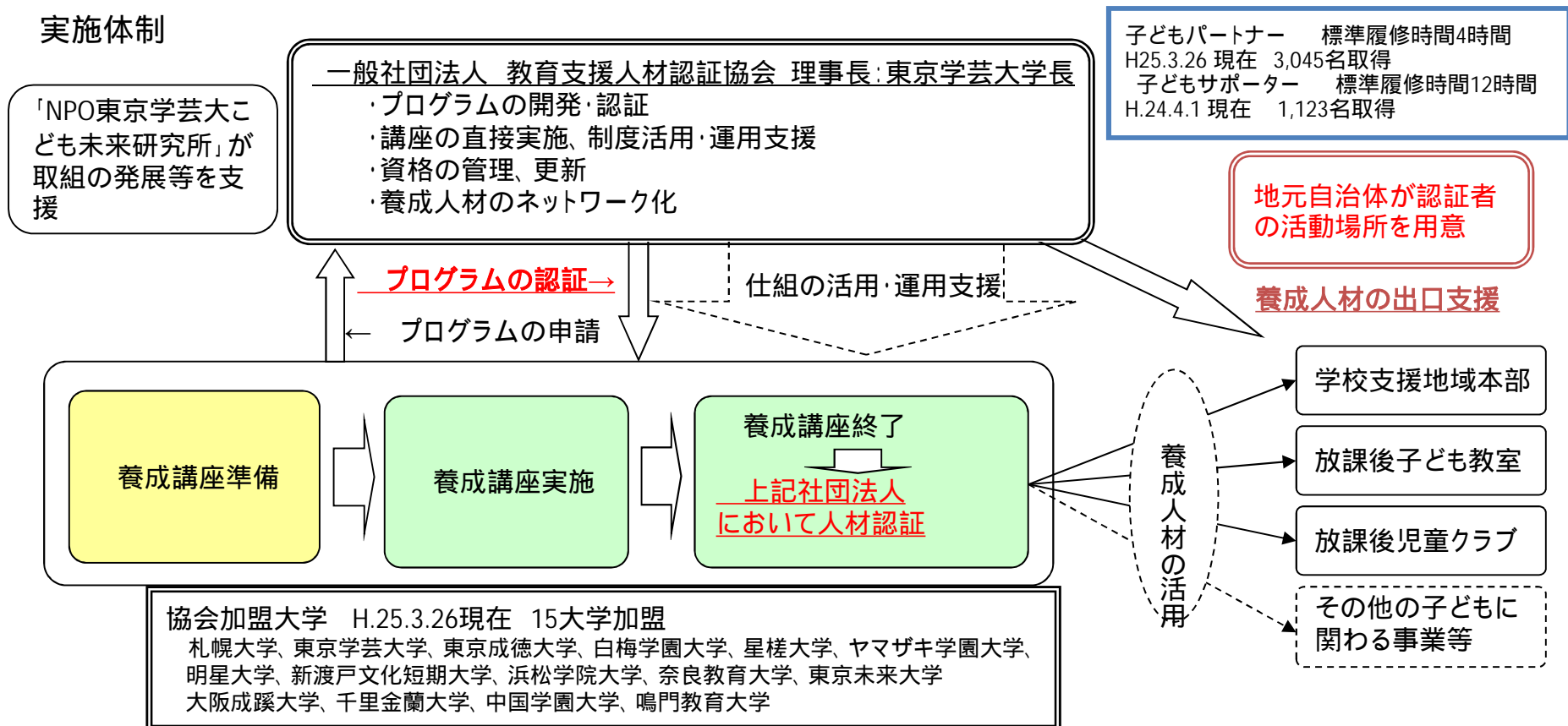
平成26年1月29日

認証制度の例

(社)教育支援人材認証協会 「教育支援人材認証制度」

大学に設置した一般社団法人が中心となり、**地域で子どもの教育活動を担う住民の活動を支援**するため、一定の受講経験や活動経験を評価・認証する、「教育支援人材認証制度」を構築。認証者の活動現場は、地元自治体が用意するなど、**地域と連携を図りつつ運用**。

実施体制



期待される効果の一例

大学の「知」を還元して地域と生涯学習に貢献 (市民にも講座を実施することで、各地域で学びを通し子どものサポートに協力できる人材を育成)

大学と地域との連携事業の拡大 (子どもをサポートする事業を協働して実施でき、その際にサポーターの協力も得られやすい)

学部教育、キャリア教育の一環として有効 (学生が認証取得後にボランティアとして活動)

教育支援人材認証制度のあらまし

ボランティアベース

キャリアベース

学びの認証

能力認証



「こどもパートナー」認証制度の特徴

- 一般社団法人「教育支援人材認証協会」が認証主体
 - ・大学、認可団体の集まりによる「持続性」と「質担保」
 - ・専門学校等、教育機関の参加
 - ・企業等の参加
- 行政、市民団体、NPO、地域住民との連携
 - ・共創型、ネットワーク型の認証制度
 - ・地域の主体性と「最低保障」の両立
- 地域の拠点としての大学の活用
 - ・大学の知的財産を利用した「質」の担保と地域性の尊重
 - ・学生や教育人材の地域アイデンティティの形成

子どもパートナーのカリキュラム

こどもパートナー ※（必要時間 4時間以上）			
領域	要素		主な学域の例
こどもに関わり合う力	支援者とは	こども支援者が必要となる社会背景とその意味・役割について理解する。こどもパートナーの理念と役割について考察する。	教育学 こども支援学 教育社会学
	こどもの理解	こころ・社会・保育・保健などのアプローチからこどもについて理解を深める。	児童心理学、教育学、保育学 障がい学、児童福祉学、保健学
	こどもを取り囲む環境	現代のこども事情とこどもを取り巻く様々な環境についての理解を深める。	こども社会学、環境学、家族臨床学、児童福祉学、情報科学、教育学、保育学、政策学、児童文化論
	こどもとの接し方	発達段階や特別なニーズのあるこどもへの支援について理解したうえで、コミュニケーションをとるための知識や技法、配慮事項を学修する。	こども支援学、教育学、心理学、児童福祉学、障がい学、保育学、ジェンダー論

こどもサポーターの特徴

- 「こどもサポーター」では、教育支援活動において教育支援者が自己PRできる、「焦点づけた支援活動の内容」を、「こどもサポーター()」として括弧書きします。
- 例えば「こどもサポーター(特別支援教育)」「こどもサポーター(伝統芸能)」「こどもサポーター(放課後子ども教室)」などです。
- 地域や大学の実情や特性に応じてプログラムをご計画ください。
- 他の認証・資格と連携して「こどもサポーター()」というプログラムを検討することも可能です。

例. グラウンドゴルフ普及指導員

こどもに関わり合える力+子どもに伝える方法(計6時間)受講
→こどもサポーター(グラウンドゴルフ)

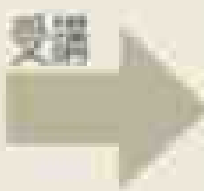
こどもサポーターのカリキュラム

こどもサポーター ※（必要時間 12時間以上）				
領域	要素		時間	主な学域の例
こどもに関わり合う力	「こどもパートナー」の4要素		4時間以上	「こどもパートナー」に準じる。
子どもと伝え合う力	支援活動の具体に焦点づけた専門的内容	サポーターとしてPRできる伝える内容についての知識・技能など	8時間以上	内容に応じた専門学域
	こどもに伝える方法	表現、理解、フィードバック、人とのつなぎ、話し方など		
自身の活動を振り返る力	自己評価と集団形成	自らの行動を振り返り修正することの意味や方法についての理解。他者と連携することの大切さや方法についてなど。		内容に応じた専門学域

制度のながれ

大学
専門学校 認定校
認定校 180 等

- ボランティア
やってみたいけど不安
- 子どもの登し方、何
となくやっているけどこれでいいかな？
- 研修して
スキルアップしたい



プログラム認証を受けた大学などが
実施する講座受講による**認証取得**

マッチングとマ
ネージメントサ
イクルの請け
負い



グッドチャンス
システム[※]等による
マッチング

**学校
教育活動**

学習支援
行事支援
安全管理支援
等

教育支援活動に関するニーズ

- 質の高いボランティアの力が
必要だったから助かります。
- もっと学生さんや市民の協
力が欲しい！

**学校
教育外活動**

放課後子どもプラン
各種教育ボランティア
等

学生
市民

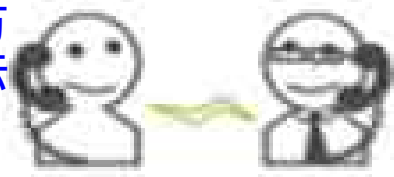
個人の自発性
に応じた「学
び」の認証

※グッドチャンスシステム…「はじめの一步活動」として希望者に教育支援現場での初回支援体験を紹介する仕組み。



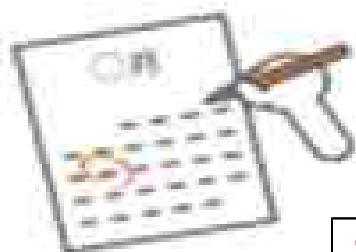
① 活動をしてみたい

【はじめの一步活動】で現場を体験してみましよう。



② 担当窓口へ連絡
打合せ

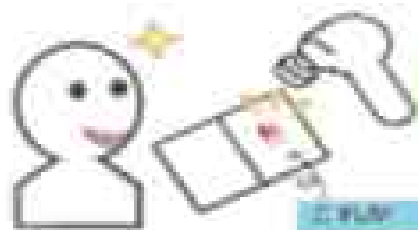
【はじめの一步活動】を申請して下さい。まずは電話連絡を推奨します。
*はじめの一步体験活動申請は一方所一度のみ。



③ 日程調整

担当者が日程調整をします。*季節や現場の諸条件で日程調整がしばらくかかることもあります。

マッチングを行政や地域・市民団体と連携してNPOが行います



④ 1日体験
スタンプ押印

活動現場の規則に従い、活動をお願いします。活動後、はじめの一步スタンプ欄にスタンプを押印してもらって下さい。*スタンプの上に活動日を書き込みましよう。

スタンプは、行政・大学・学校・NPO・市民団体・各種協会に設置されることを進めています



⑤ 体験を振り返り
ましよう

体験後、次回以降のお誘いがかかることがあります。是非活動を続けて下さい。
*様々な事情で声がかからないことがあります。その際はごへ。

すでに活動をされている方へ

すでに活動されている方へは【はじめの一步体験】で他の現場を体験することが可能です。その際は担当窓口へご連絡下さい。



この
こどもモードスタンプ

⑥ 活動後
スタンプを押印

2回目以降の活動からは活動後、【こどもモードスタンプ】を押印してもらって下さい。*スタンプの上に活動日、活動内容を書き込みましょう。



⑦ スタンプを集め、
活動の振り返りに
利用しましょう

スタンプはあなたの活動履歴です。時々活動を振り返り、今後の活動に活かして下さい。*次のステップ(こどもサポーターなど)を目指しましょう。

教育支援士等への要件

子どもの育ちのために、スタッフ同士のより良い関係、活動のために、日々の活動の振り返りは重要です。このパスポートがそのサポートになることを願っています。

平成22年度府中市での事例

NPO法人
東京学芸大こども未来研究所

東京学芸大学他6大学で開発したシステムを運用する組織
・プログラム認証 ・個人認証 の認証組織

プログラム設計と現場の
ニーズ

市と連携したプロ
グラム設計

講師派遣

コンサルティング(マッチングシ
ステム含む)

府中市

講座実施依頼

マッチング窓口の設置

府中市こどもサパー
ター講座

認証
こども
パートナー申請

個人の任意の申請

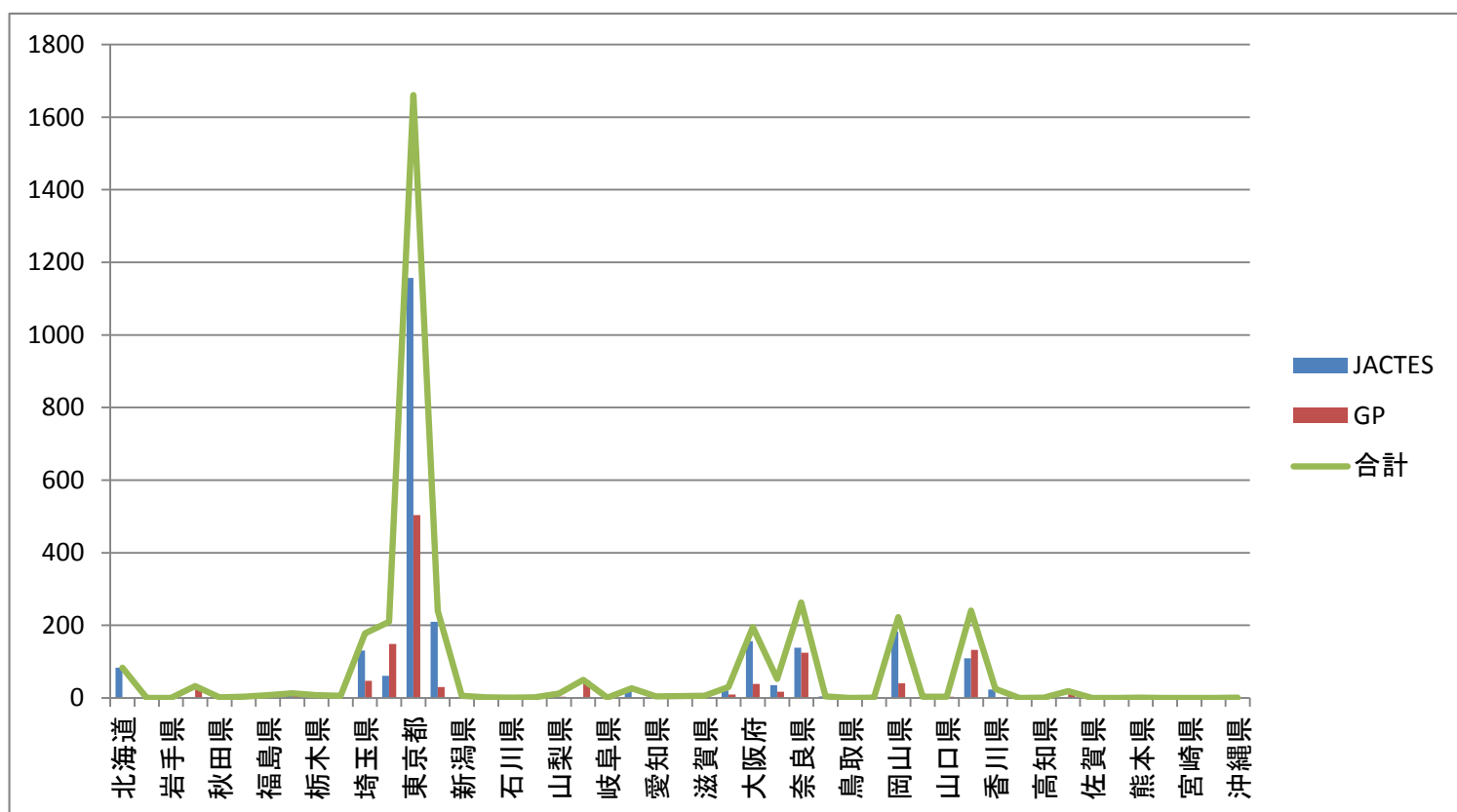
パスポート
発行
会員
サービス
(10月より)

受講

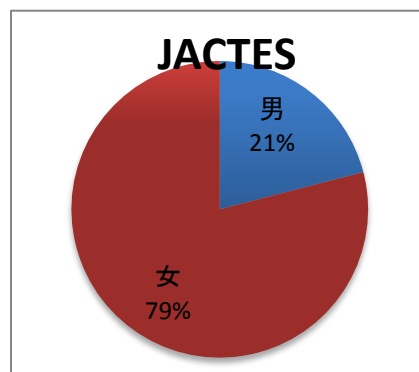
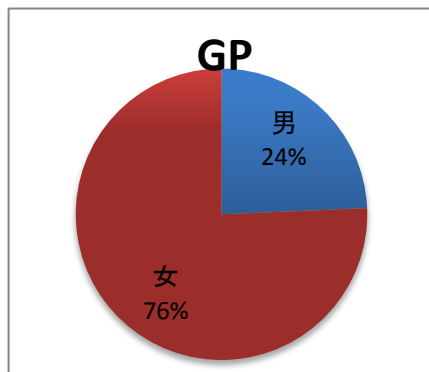


市民
受講者





	JACTES	GP	合計
男	503	216	719
女	1896	672	2568
合計	2399	888	3287



GP期間時

	JACTES	GP	
パートナー	2399	1224	名
サポーター	756	503	個

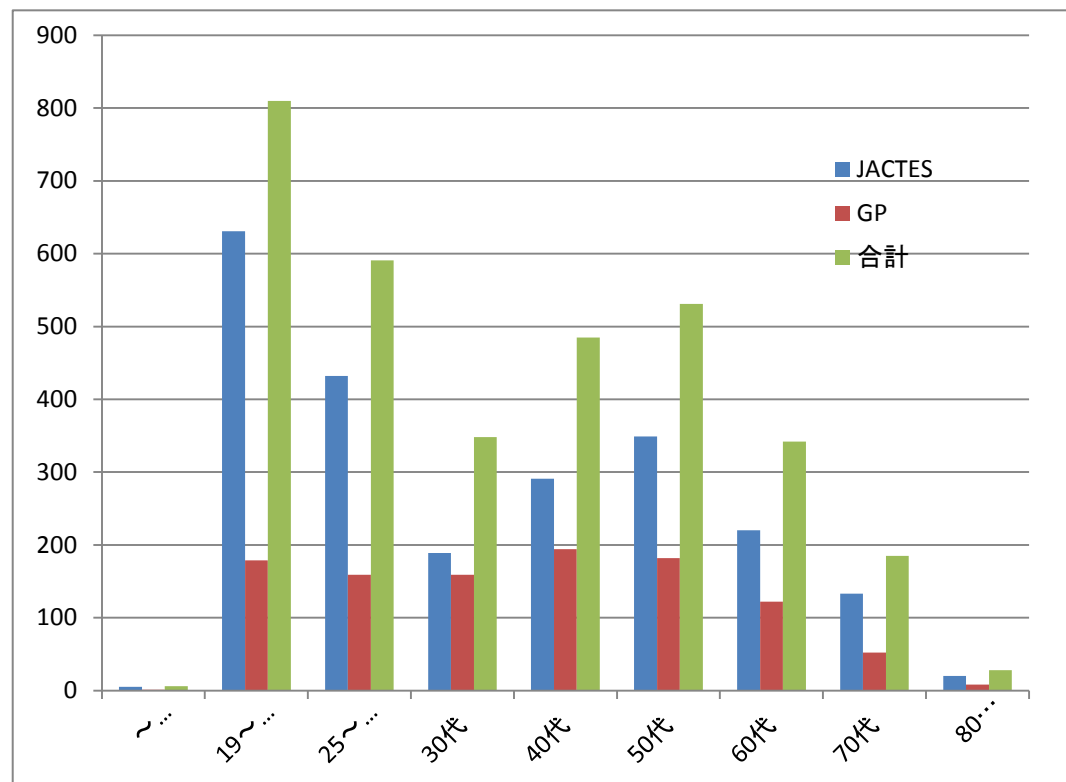
※この数字は、現在発行されているサポーター認証の総数であり、一人が複数有している場合は、有している数の分カウントしています。

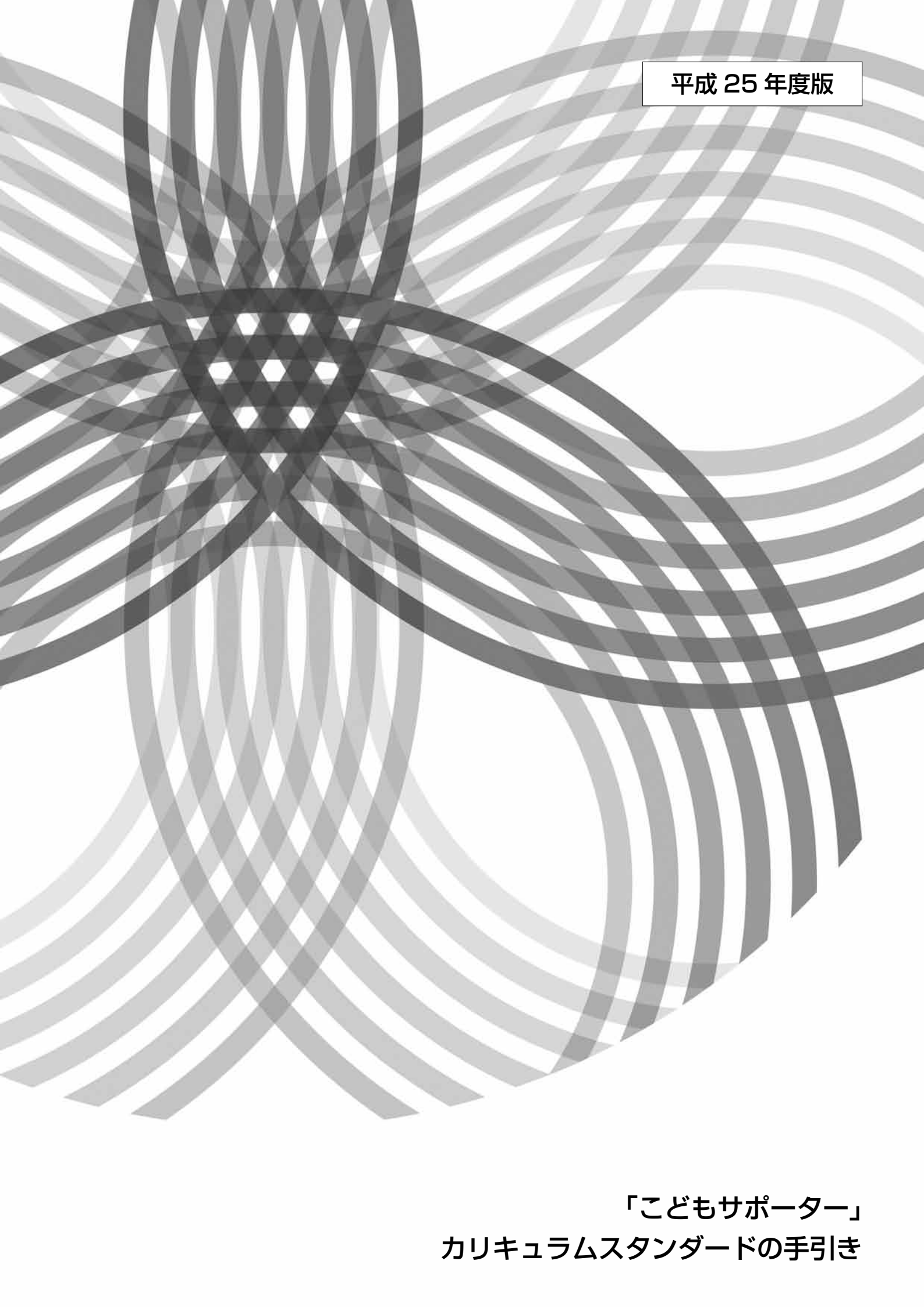
サポーター所有数別

	1個	2個	3個	4個以上		サポーター取得者数
JACTES	579	72	11	0		662名
GP	391	50	4	0		445名

合計年齢層

	JACTES	GP	合計
～18歳	5	1	6
19～24歳	631	179	810
25～29歳	432	159	591
30代	189	159	348
40代	291	194	485
50代	349	182	531
60代	220	122	342
70代	133	52	185
80代以上	20	8	28
合計	2270	1056	3326





平成 25 年度版

「こどもサポーター」
カリキュラムスタンダードの手引き

I 研修プログラムの考え方	2
1. 「こどもパートナー」と「こどもサポーター」との関係	
2. 「こどもサポーター」の講義	
3. 社会人対象と学生対象	
4. 学生対象の研修	
5. 「こどもサポーター」研修の領域と講義題・項目	
6. 領域とコマ数	
II 「こどもサポーター」(アフタースクール) 研修の概要	4
1. 「こどもサポーター」(アフタースクール) 研修の趣旨	
2. こどもサポーター(アフタースクール)の研修スタンダード	
3. 「こどもパートナー」認証の読み替え	
III 「こどもサポーター」(特別支援教育) 研修の概要	7
1. 「こどもサポーター」(特別支援教育) 研修の趣旨	
2. 「こどもサポーター」(特別支援教育)の研修スタンダード	
3. 「こどもパートナー」認証の読み替え	
IV 「こどもサポーター」(学習支援) 研修の概要	10
1. 「こどもサポーター」(学習支援) 研修の趣旨	
2. 「こどもサポーター」(学習支援)の研修スタンダード	
3. 「こどもパートナー」認証の読み替え	
V 「こどもサポーター」(外国語活動) 研修の概要	13
1. 「こどもサポーター(外国語活動)」研修の趣旨	
2. 「こどもサポーター(外国語活動)」の研修スタンダード	
3. 「こどもパートナー」認証の読み替え	
VI 「こどもサポーター」(こころ支援) 研修の概要	16
1. 「こどもサポーター」(こころ支援) 研修の主旨	
2. 「こどもサポーター」(こころ支援)の研修スタンダード	
3. 「こどもパートナー」認証の読み替え	
VII 「こどもサポーター」(学校活動支援) 研修の概要	19
1. 「こどもサポーター」(学校活動支援) 研修の主旨	
2. 「こどもサポーター」(学校活動支援)の研修スタンダード	
3. 「こどもパートナー」認証の読み替え	
VIII 「こどもサポーター」(ゲストティーチャー) 研修の概要	22
1. 「こどもサポーター」(ゲストティーチャー) 研修の主旨	
2. 「こどもサポーター」(ゲストティーチャー)の研修スタンダード	
3. 「こどもパートナー」認証の読み替え	
IX 「こどもサポーター」(読み聞かせ) 研修の概要	25
1. 「こどもサポーター」(読み聞かせ) 研修の主旨	
2. 「こどもサポーター」(読み聞かせ)の研修スタンダード	
3. 「こどもパートナー」認証の読み替え	
X 「こどもサポーター」(世代間交流) 研修の概要	25
1. 「こどもサポーター」(世代間交流) 研修の主旨	
2. 「こどもサポーター」(世代間交流)の研修スタンダード	
3. 「こどもパートナー」認証の読み替え	
XI 「こどもサポーター」(子育て支援) 研修の概要	25
1. 「こどもサポーター」(子育て支援) 研修の主旨	
2. 「こどもサポーター」(子育て支援)の研修スタンダード	
3. 「こどもパートナー」認証の読み替え	

I . 研修プログラムの考え方

1. 「こどもパートナー」と「こどもサポーター」との関係

本研修では基礎認証としての「こどもパートナー」の4コマに、8コマが加わって「こどもサポーター」認証を取得できる仕組みを構想している。

この内、「こどもパートナー」の講義は基本・基礎的な内容を概観する性質を持つので、概論風にならざるをえない。それに対し、「こどもサポーター」の講義は、主として、意欲的な社会人を対象として実施する研修なので、分かりやすさも大事だが、焦点をしぼって最新の研究成果を伝達するような質の高さを確保することに留意して欲しい。具体的には大学の公開講座をイメージしてはどうかと思う。

なお、「こどもサポーター」認証を付与する研修の場合、「こどもパートナー」の4コマと「こどもサポーター」の8コマに研修を分離するのではなく、12コマを一貫させ、専門講座のような性格で全体を構成することが望ましい。

2. 「こどもサポーター」の講義

「こどもサポーター」の講義として、表1に示すように、全体を8領域に分け、各領域に12の講義題・項目案を提示した。研修計画の策定にあたっては、主催団体の条件や受講者の属性などにより、それぞれの状況に応じたプログラム作りが行われることになる。その際、講座内容の充実が重要になるので、それだけに魅力的な講師陣の確保に心がけて欲しい。

主催団体の創意工夫を尊重する意味で、講義題・項目・事項はあくまで参考としての例示したものにすぎない。具体的な講義題・項目は研修の趣旨や講師の専門領域を生かし、各主催団体の検討に委ねたい。

3. 社会人対象と学生対象

研修対象が「社会人」か「学生」かによって、研修の構成が異なる。社会人の場合、豊富な実体験を持ってはいるが、専門分野の情報から遮断されている。それだけに、社会人に対しては最新の研究に基づく先端に行く内容を伝えることが重要になる。それに対し学生の場合—特に教育学部や子ども学部などでは—子ども関係の講義を聞いているので、研修にあたって、講義形式だけでなく、フィールドワークや話し合い、事前・事後指導などの実践的な指導に一定の時間を割くことが望まれよう。

4. 学生対象の研修

学生対象の研修には①既設の講義科目の活用と②独自の研修プログラムの設定、③両タイプの混合の3タイプが考えられる。しかし、本研修の趣旨を考えると、通常の講義とは別に独自の研修を実施する②または③の形態が望ましい。

①の場合、「こどもサポーター」8コマの要件（「こどもパートナー」の4コマを含めて12コマ）を充たしていることが要件になるが、その際、講義シラバスに本研修の内容が提示されていることが必要である。また、②の場合、通常の講義との差別化を図るために、フィールドワークや話し合い、事前指導などの実践的な指導を試みて欲しい。③の形態として、①の既設の講義と②の独自の研修との組み合わせが考えられる。この場合、②の独自の研修として、少なくとも4コマ以上の研修が必要となる。また、課題を与えてレポートを提出させ、レポートをもとに話し合う形式なども一つのモデルとなる。

5. 「こどもサポーター」研修の領域と講義題・項目

「こどもサポーター」8 コマの構成について、表 1 に 8 領域、96 の講義題・項目案を示した。各領域から 1 コマ、計 8 コマの受講を想定しているが、各主催団体の研修目的によって、1 領域から 3 コマまで講義を設定できる。ただし、4 領域以上をカバーすることが必要である。

なお、1 講義の長さは 60 分以上とするが、社会人対象の場合、質疑を含めて 90 分が望ましい。この場合、90 分の講義は 60 分の 1.5 倍と考えられるので、90 分・8 コマ（90 分×8 = 720 分）で 12 コマ分（60 分×12 = 720 分）に換算することができる。ただし、長さに関連なく、「90 分・12 コマ」の本格的な研修の展開を歓迎したい。

6. 領域とコマ数

「こどもパートナー」講座を展開するにあたって、「こどもサポーター」講座とを一体化して実施する研修が多いと思われる。その場合は、「こどもパートナー」の 4 コマに、「こどもサポーター」の 8 コマを加え、12 コマの講義を行うことになる。表 1.3 に示した 8 領域中から各 1 コマを選択して研修計画を立てるのを想定してプランを作成した。しかし、研修プログラムの目的に応じた柔軟なカリキュラム編成を可能にするため、1 領域から 3 コマ以内の選択を認める。但し、4 領域以上を確保することが必要である。

講義は 1 コマ 60 分以上とする。ただし、「こどもサポーター」の研修では、講義が伝達型になるのを避け、受講生の自発性を促すために、講義の後に 20 分以上の質疑の時間や話し合いの時間をとることを勧めたい。この場合、講義時間が全体として 90 分となるので、この講義を 1.5 コマとして換算できる。

Ⅱ．「こどもサポーター」（アフタースクール）研修の概要

1. 「こどもサポーター」（アフタースクール）研修の趣旨

放課後の子どもの居場所作りは学童保育や放課後子ども教室、プレーパークなどの形で、試みられてきている。本研修では、そうした放課後の子どもの居場所作りの試みを「アフタースクール」と総称したい。なお、アフタースクールは、欧米で学校と家庭とをつなぐ重要な場として定着している制度名である。日本の現状と比較した時、欧米のアフタースクールは、

- ①きちんと制度的に位置づいている。
- ②施設・設備が充実している。
- ③指導者は教員免許に放課後指導の研修を済ませた認証保持者で構成されているなどが目につく。

日本でも、社会参加する母親が増加するにつれて、放課後の子どもの安全を求める社会的な需要が増加しており、放課後子ども教室の設置なども進んでいる。しかし、今後に多くの課題も残している。一例をあげるなら、アフタースクールには学年を異にする多くの子どもが自由参加しているので、指導にあたっての計画作りが肝要になるが、そのための設備や予算が貧困という印象を受ける。それと同時に、多様な子どもを指導するために、指導者には従来の教師と異なる働きが求められるが、指導者の育成も遅れている。

本講座では、アフタースクールの正規の指導者というより、教師とも保護者とも異なる立場で、子どもを支える「こどもサポーター（アフタースクール）」の育成を目指している。本講座を通して、子ども問題についての研修を積むと同時に市民感覚を持って子どもと接する。本講座の認証取得者には、そうした新しいタイプの指導者像を実現して欲しいと切望している。

2. 「こどもサポーター」（アフタースクール）の研修スタンダード

こどもサポーター（アフタースクール）の研修スタンダードを次ページの表1に示した。全体を8領域に分け、それぞれの領域に12の講義題・項目例を示した。前述したように8領域96講義題・項目を参照して、4領域以上にわたって8コマの講義題目を設定して欲しい。

表1 こどもサポーター(アフタースクール)の研修スタンダード

領域	学習目的	講義題・項目	例
1. 指導者論	本研修は教育支援人材の育成を目指している。サポーターは教師ではなく、どう いう指導者なのか。指導者像をつかんで 欲しい。	教職論概説 専門職論の系譜 権威の構造 コーチングの基礎理解 アサーションの勧め 子どもの望む指導者像	ほめると叱るの間 子ども集団の指導 子どもスポーツの指導者 モンスターペアレント論 クレーム対応に学ぶ 動機つける指導者
2. 子ども理解	「子ども理解」が困難になりつつある。本 研修を契機として、自分なりの子ども像 を築いて欲しい。	子ども理解の基礎 子ども期の基礎理解 子どもの発達を捉える 幼児期理解を深める 現在の青年期 子どもの心理理解	孤立化する子どもたち 欧米の子ども事情 一人っ子政策下の中国 過教育の韓国 子どもと貧困 現在の子育て事情
3. 子ども臨床の 基礎	子どもの心を理解することは容易でな い。この領域の講義は専門的な学習への 入り口的な意味を持つ。今後の自主学習 を期待したい。	カウンセリング入門 サイコドラマの基礎 子どもの自尊感情 箱庭療法に学ぶ 「傾聴」の心 虐待の理解	保健室の現状と使命 アスペルガー理解の基礎 ADHD・LD理解の基礎 知能の構造 しょうがいとは何か 「切る」と「包む」
4. 変容する家族	家族が大きな変容を見せている。現在の 家族の持つ多様な側面を学び、深く掘り 下げて家族を理解して欲しい。	少子化社会の子育て 母性と父性 働く母親の子育て 父親の育児関与 機能喪失する家族 家族文化の国際比較	家族崩壊と子ども 育児不安の構造 一人っ子の成長 子どもの手伝い 食育を考える 金銭のしつけ
5. 学校教育の 課題	子どもにとって学校はどういう存在なの か。子どもの視点から、現在の学校の持 つ課題を考えて欲しい。	近代化と学校 戦後教育を振り返る 基礎学力とは何か 学級指導をめぐる 学級王国の思想 学校選択の理念と現状	特別支援教育の理解 学校経営の基礎 学級指導と教科指導 小1プロブレム 曲がり角に立つPTA 学習塾と学校
6. 地域・社会と 子ども	子どもは社会の中で成長する。社会と子 どもとの接点についての視野を広げ、総 合的な子ども観を身につけて欲しい。	アフタースクールの理念 欧米のアフタースクール アフタースクール事例研究 ケータイ文化の子ども テレビ視聴の功罪 メディアとしてのテレビ	マンガ文化への理解 ユビキタス社会に生きる 有害情報への対応 心理空間としての地域 高学歴社会の子ども 少年犯罪の基礎理解
7. 子どもの 人間関係	子どもの孤立化が進んでいる。子どもの 人間関係の持つ意味を探ると同時に、人 間関係を広げる具体的な指導力を身に付 けて欲しい。	現代の友だち 学級集団の子ども関係 いじめ理解を深める 子どものレジリエンス 人間関係ゲームの実践 エンカウターの研究	ひきこもりを考える 依存と自立との相克 グレートマザーとは 母子関係の形成 家庭内暴力の理解 祖父母と孫の距離
8. 遊び集団の 理論と指導	学群れ遊びを知らない子どもが増加して いる。遊びについて、理論的な裏打ちを 持って、遊び集団の指導を行って欲しい。	遊び文化論 子どもの遊びの社会史 遊びと勉強との間 子ども集団の捉え方 野外活動のポイント キャンプ指導の技術	エンカウター入門 人間関係ゲームの体験 集団ゲームの実践 遊びを伸ばす指導 ゲームの指導を深める 入門・救急看護法

3. 「こどもパートナー」 認証の読み替え

「こどもパートナー」 認証付与の 4 コマについては、表 2 を参照として、「こどもサポーター」 研修の中から 4 コマを学習すれば、読み替えることができる。なお、こどもパートナーの講義は 60 分を原則としているが、こどもサポーターの場合、90 分を基本とする研修が多い。その場合、90 分の講義 3 コマ(90 分× 3 = 270 分) で 4 コマ(60 分× 4 = 240 分) 分として換算できるものとする。ただし、「1 支援者とは」は必修扱いとする。

表 2 こどもパートナーとこどもサポーター(アフタースクール) との読み替え

こどもパートナー	こどもサポーター
1 支援者とは	1 指導者論
2 子ども理解	2 子ども理解 3 子ども臨床の基礎
3 子どもを取り巻く環境の理解	4 変容する家族 5 学校教育の課題 6 地域・社会と子ども
4 子どもとの接し方	7 子どもの人間関係 8 遊び集団の理論と指導

1. 「こどもサポーター」（特別支援教育）研修の趣旨

特別支援教育に社会的な関心が集まっているが、特別支援を求める子どもは特別支援学級だけでなく、普通学級やアフタースクールにもそうした子どもの姿が見られる。そうした子どもも近くにサポートする大人がいれば、精神的に安定することが多いといわれる。

本研修は特別支援を専門とする教員の養成を目標とするものではなく、支援を求める子どもをさまざまな場面でサポートする人材の育成を目指している。もちろん、支援を求める子どものサポートであるから、特別支援についての基礎的な知識や技能を身につけることも必要だが、その一方で、保護者と同じような身内的な感覚で子どもに接して欲しい。

2. こどもサポーター（特別支援教育）の研修スタンダード

こどもサポーター（特別支援教育）の研修スタンダードを次ページの表 3 に示した。全体を 8 領域に分け、それぞれの領域に 12 の講義題・項目例を示した。前述したように 8 領域 96 講義題・項目を参照して、4 領域以上にわたって 8 コマの講義題目を設定して欲しい。

Ⅲ. 「こどもサポーター」(特別支援教育)研修の概要

表3 こどもサポーター(特別支援教育)の研修スタンダード

領域	学習目的	講義題・項目 例	
1. 指導者論	こどもサポーターは教師としてではなく、子どもをサポートする役割が期待される。それは、どういう指導者なのか。指導者像をつかんで欲しい。	教職論概説 専門職論の系譜 権威の構造 子どもの望む指導者像 援助者に求められる資質 スクールコーディネーター論	ほめると叱るの間 子ども集団の指導 モンスターペアレント論 スクールカウンセラーの役割 サポートする心 子どもによりそう
2. 子どもの心の理解	「子ども理解」が困難になりつつある。本研修を契機として、自分なりの子ども像を築いて欲しい。	子ども理解の基礎 子どもの発達を捉える 子どもの心理理解 孤立化する子どもたち 青少年のひきこもり 現在の子育て事情	子どもの自尊感情 レジリエンスを培う 軽度発達障害のとりえ方 学習のつまずき メンタルヘルスのとりえ方 社会的自立とは何か
3. 障害児理解の基礎	子どもの心を理解することは容易でない。この領域の講義は専門的な学習への入り口的な意味を持つ。今後の自主学習を期待したい。	しょうがいとは何か LD理解の基礎 ADHD理解の基礎 アスペルガー症候群理解の基礎 自閉症と自閉傾向の理解 PDD(広汎性発達障害)のとりえ方	カンセリング入門 特別支援教育の考え方 特別支援学級での指導 統合教育の是非 欧米のしょうがい児教育に学ぶ 盲聾の教育史
4. 家族との連携	しょうがいのある子どもを育てるのは家族の大きな負担となる。そうした家族をどう支援するのか、家族の観点から、障害を考えて欲しい。	少子化社会の子育て 母性と父性 働く母親の子育て 父親の育児関与 機能喪失する家族 児童虐待の診断	家庭内暴力への洞察 ペアレントトレーニング 家族崩壊と子ども 育児不安の構造 子どもの手伝い 食育を考える
5. 学校教育の役割	しょうがいのある子どもにとって学校はどういう存在なのか。子どもの視点から、現在の学校の持つ課題を考えて欲しい。	基礎学力とは何か 学級指導をめぐる 学校経営の基礎 学級指導と教科指導 不登校への理解 いじめの基礎知識	特別支援教育の理解 普通学級での支援 読み書きの指導 養護教諭の役割 保健室の現状と使命 学校での連携体制作り
6. 地域・社会と子ども	子どもは社会の中で成長する。社会と子どもとの接点についての視野を広げ、総合的な子ども観を身につけて欲しい。	アフタースクールの理念 ケータイ文化の子ども テレビ視聴の功罪 メディアとしてのテレビ 有害情報への対応 高学歴社会の子ども	マンガ文化への理解 少年犯罪の基礎理解 しょうがい児の就労支援 発達障害と偏見 社会的な自立への取り組み 欧米に見る障害者支援
7. しょうがいへの対応	しょうがいをどうとらえたらよいか。特別支援教育に取り組む前提として、きちんとした「しょうがい観」を身につけて欲しい。	しょうがいはハンデなのか いじめ理解を深める コーディネーターの役割 子どものレジリエンス ひきこもりを考える グレートマザーとは	心理検査入門 サイコドラマの基礎 遊戯療法の示唆するもの 箱庭療法の実際 「傾聴」を学ぶ 共感的理解の心
8. 特別支援教育のノウハウ	特別支援教育に関わるためにはきちんとしたノウハウの習得が必要になる。本研修の指導は入門レベルにとどまるので、今後の自己研修に期待したい。	コーチングの基礎理解 アサーションの勧め セカンド・ステップ入門 NPOでの取り組み事例 子ども集団と個別指導 学習につまずく子の指導	ソーシャルスキルの形成 エンカウンター入門 人間関係ゲームの展開 声かけの秘訣 親への対応を学ぶ 入門・救急看護法

3. 「こどもパートナー」認証の読み替え

「こどもパートナー」認証付与の4コマについては、表4を参照として、「こどもサポーター」研修の中から4コマを学習すれば、読み替えることができる。なお、こどもパートナーの講義は60分を原則としているが、こどもサポーターの場合、90分を基本とする研修が多い。その場合、90分の講義3コマ(90分×3=270分)で4コマ(60分×4=240分)分として換算できるものとする。ただし、「1 支援者とは」は必修扱いとする。

表4 こどもパートナーとこどもサポーター(特別支援教育)との読み替え

こどもパートナー	こどもサポーター
1 支援者とは	1 指導者論
2 子ども理解	2 子どもの心の理解 3 障害児理解の基礎
3 子どもを取り巻く環境の理解	4 家族との連携 5 学校教育の役割 6 地域・社会と子ども
4 子どもとの接し方	7 しょうがいへの対応 8 特別支援教育のノウハウ

1. 「こどもサポーター」（学習支援）研修の趣旨

学校における授業の補助や、教育課程外での学習活動を支援する教員以外の大人の存在が注目されている。地域に様々な背景を抱え、学習促進に資する環境が一定ではない中、地域からの教育参画による子どもたちの学びのサポートは、大きな可能性を秘めていると言ってよいと思われる。

本研修は、学習支援を求める子どもをさまざまな場面でサポートする人材の育成を目指している。もちろん、支援を求める子どものサポートであるから、学習についての基礎的な知識や技能を身につけることも必要だが、その一方で、保護者と同じような身内的な感覚で子どもに接して欲しい。

2. こどもサポーター（学習支援）の研修スタンダード

こどもサポーター（学習支援）の研修スタンダードを次ページの表 5 に示した。全体を 8 領域に分け、それぞれの領域に 12 の講義題・項目例を示した。前述したように 8 領域 96 講義題・項目を参照して、4 領域以上にわたって 8 コマの講義題目を設定して欲しい。

表5 こどもサポーター(学習支援)の研修スタンダード

領域	学習目的	講義題・項目 例	
1. 指導者論	こどもサポーターは教師としてではなく、子どもをサポートする役割が期待される。それは、どういう指導者なのか。指導者像をつかんで欲しい。	教職論概説 専門職論の系譜 権威の構造 子どもの望む指導者像 援助者に求められる資質 スクールコーディネーター論	ほめると叱るの間 子ども集団の指導 モンスターペアレント論 スクールカウンセラーの役割 サポートする心 子どもによりそう
2. 子どもの心の理解	「子ども理解」が困難になりつつある。本研修を契機として、自分なりの子ども像を築いて欲しい。	子ども理解の基礎 子どもの発達を捉える 子どもの心理理解 孤立化する子どもたち 青少年のひきこもり 現在の子育て事情	子どもの自尊感情 レジリエンスを培う 軽度発達障害のとりえ方 学習のつまずき メンタルヘルスのとりえ方 社会的自立とは何か
3. 子どもの主体性の尊重	学習とは、子どもの主体的な営みである。しかし、主体性を尊重することは、一方で「放任」することと同じではない。主体性を引き出す教育のあり方についてここでは考えてほしい。	学習と教育 学習とは何か 学び論の系譜 指導性と自発性 学習過程の考え方 主体性とは何か	子どもの人権 学習形態の考え方 評価と評定 総合的な学習の時間とは 主体性を引き出す教育実践例
4. 学校教育の役割	しょうがいのある子どもにとって学校はどのような存在なのか。子どもの視点から、現在の学校の持つ課題を考えて欲しい。	基礎学力とは何か 学級指導をめぐって 学校経営の基礎 学級指導と教科指導 不登校への理解 いじめの基礎知識	特別支援教育の理解 普通学級での支援 読み書きの指導 養護教諭の役割 保健室の現状と使命 学校での連携体制作り
5. 教師論	学校の授業に欠かせない要素の一つとして、教師の存在がある。学習支援は、授業時間内においては、一方で教師の支援でもある。学習における教師の役割について理解を深めたい。	授業の3要素 授業の構造 教師の役割 近代化と学校・教師の制度化 教師をめぐる法規	公教育と行政 教師のキャリアパターン 教員養成と教員研修 教師文化 コーディネーターの役割 教師の専門性 ティームティーチング
6. 教材論	学習を組織的、意図的に促そうとした場合、学習を引き出すための教材が持つ意味は大きい。ここでは教材についての基礎的な理解を深めたい。	教材とは何か 学習内容と教材 学習指導要領と教材 教材の作り方 IT教材 視聴覚機器の利用と効果	教材事例集 よい教材を使った学習指導例 ネットワークの形成と 教材の相互利用
7. 地域・社会と子ども	子どもは社会の中で成長する。社会と子どもとの接点についての視野を広げ、総合的な子ども観を身につけて欲しい。	アフタースクールの理念 ケータイ文化の子ども テレビ視聴の功罪 メディアとしてのテレビ 有害情報への対応 高学歴社会の子ども	マンガ文化への理解 少年犯罪の基礎理解 しょうがい児の就労支援 発達障害と偏見 社会的な自立への取り組み 欧米に見る障害者支援
8. 学習集団の理論と指導	学習支援に関わるためには集団学習時のノウハウの習得が必要になる。本研修の指導は入門レベルにとどまるので、今後の自己研修に期待したい。	コーチングの基礎理解 アサーションの勧め セカンド・ステップ入門 NPOでの取り組み事例 子ども集団と個別指導 学習につまずく子の指導	ソーシャルスキルの形成 エンカウンター入門 人間関係ゲームの展開 声かけの秘訣 親への対応を学ぶ ワークショップ形式

3. 「こどもパートナー」認証の読み替え

「こどもパートナー」認証付与の4コマについては、表6を参照として、「こどもサポーター」研修の中から4コマを学習すれば、読み替えることができる。なお、こどもパートナーの講義は60分を原則としているが、こどもサポーターの場合、90分を基本とする研修が多い。その場合、90分の講義3コマ(90分×3=270分)で4コマ(60分×4=240分)分として換算できるものとする。ただし、「1 支援者とは」は必修扱いとする。

表6 こどもパートナーとこどもサポーター(学校支援)との読み替え

こどもパートナー	こどもサポーター
1 支援者とは	1 指導者論
2 子ども理解	2 子どもの心の理解 3 子どもの主体性の尊重
3 子どもを取り巻く環境の理解	4 学校教育の役割 5 教師論 6 教材論 7 子どもとの接し方
4 子どもとの接し方	8 学習集団の理論と指導

1. 「こどもサポーター」(外国語活動) の趣旨

2011年4月から小学校5・6年生に「外国語活動」として英語が導入された。「こどもサポーター(外国語活動)」は、小学校の担任の先生や外国語活動を担当する先生(以下担当教員)の授業やその準備をサポートし、こどもたちが楽しく外国語に触れることができるように補助することを目的として設定されている。

本研修は外国語活動を専門とする教員の養成を目標とするものではなく、あくまでも活動の支援を行なうことを目標としている。意欲のある方ならばどなたでも可能であるが、できれば担当する外国語(当面は英語)についての一定の知識や技能があることが望まれる。

2. 「こどもサポーター」(外国語活動) の研修スタンダード

こどもサポーター(外国語活動)の研修スタンダードを次ページの表7に示した。全体を8領域に分け、それぞれの領域に12の講義題・項目例を示した。以下を参考にして、4領域以上にわたって8コマ(720分)の講義題目を設定して欲しい。

V. 「こどもサポーター」(外国語活動) 研修の概要

表7 「こどもサポーター (外国語活動)」の研修スタンダード

領域	学習目的	講義題・項目 例
1. 指導者論	こどもサポーターは教師としてではなく、こどもをサポートする指導者としての役割が期待される。それはどういう指導者なのか、その指導者像をつかむ。	教育支援人材認証とは 教職論概説 指導者論 指導と指導者の権威 子どもの望む指導者像 援助者に求められる資質
2. 子どもの理解	こどもの変化が激しくつかみにくくなっている。今子どもたちはどうなっているのか、こどもを理解することによってサポーターとしての役割を理解できるようにする。	子どもの発達をとらえる 子どもの心の理解 子どもの権利と保護 孤立化する子どもたち 不登校と引きこもり 現在の子育て事情を学ぶ
3. 子どもを取り巻く環境の理解	国際化時代あるいは多文化時代といわれる中で、子どもを取り巻く環境がどのようになっているのか学び、外国語活動のサポートのポイントをつかむ。	少子化社会の家族・地域 地域社会の変容と子ども 消費社会と遊びの変化 メディアの影響と子ども 国際化と多文化共生 コミュニケーション不全
4. 「外国語活動」をとりまく背景(背景の理解)	小学校に外国語活動が導入された背景や経緯、法的な根拠について理解し、小学校における外国語活動の意味や課題をつかむ。近隣諸国の状況をつかむ。	学習指導要領とは何か 教育課程(カリキュラム)考 外国語活動と英語の関係 総合的な学習の時間 帰国子女問題と外国語 アジアの小学校英語は?
5. 「外国語活動」とは何か(科目等の理解)	学習指導要領に導入された「外国語活動」についてその内容を学び、学校教育の中でのあり方や対応について基礎的な理解をする。具体的な活動について理解する。	外国語と外国語活動 外国語活動の目標 外国語活動の内容を見る 外国語活動と日本語教育 外国語で コミュニケーションする
6. 外国語活動の授業(2)基本	外国語活動の授業について実践的にそのすすめ方を学ぶ。特に基本的な活動について具体例をもとにして子どもたちの前で実践できるように技術を習得する。	英語の音声と文字の関係 身近な英語から学ぶ 子どものための教材作り 会話活動の実践の進め方 家庭の行事を授業に
7. 外国語活動の授業(2)発展	外国語活動の授業について実践的にそのすすめ方を学ぶ。特に基本的な活動について具体例をもとにして子どもたちの前で実践できるように技術を習得する。	外国語の表現を学ぶ 日本語との違いを知る 外国語の仕組みを学ぶ 模擬授業をやってみよう ネイティブ・スピーカー 地域での行事を授業に
8. 外国語活動におけるサポーターとは何か	外国語活動のサポーターは単に教室の支援だけでなく、その外国語の技術や能力が求められ、時には教室の前面に立つこともあり、臨機応変に対応できる力を身につける。	担任との協働(TT)とは 外国語についての見識 こどもの発達段階の理解 授業補助と先導者の役割 ネイティブ・スピーカー

*基本的には60分で12コマ(720分)ですが、90分を基本とする場合は上記8つの領域から必ず4つ以上を実施する。

3. 「こどもパートナー」認証の読み替え

「こどもパートナー」認証付与の4コマについては、以下の表8を参照として、「こどもサポーター」研修の中から4コマを学習すれば、読み替えることができる。なお、「こどもパートナー」の講義は60分を原則としているが、「こどもサポーター」の場合、90分を基本とする研修が多い。その場合、90分の講義3コマ(90分×3=270分)で4コマ(60分×4=240分)分として換算できるものとする。ただし、「1. 支援者とは」は必修扱いとする。

表8 こどもパートナーとこどもサポーターの読み替え

こどもパートナー	こどもサポーター (外国語活動)
1 支援者とは	1 指導者論
2 子ども理解	2 子どもの理解
3 子どもを取り巻く環境の理解	3 子どもを取り巻く環境の理解
4 子どもとの接し方	6 外国語活動の授業 7 外国語活動の授業

1. 「こどもサポーター」（こころ支援）の趣旨

小学校や中学校における不登校やひきこもりについては、学校の教員だけで解決できないことが多く、第三者の関わりが求められている。「こどもサポーター（こころ支援）」は、学校やクラスあるいは社会になじめない子どもたちに対して、居場所作りを基本とした人や社会との接点作りをサポートすることを狙いとする。こどもの心がどうなっているのか、なぜ閉じこもってしまうのか、どう対処したら良いのか、それらを学んでサポートできる人を求めている。

2. 「こどもサポーター」（こころ支援）の研修スタンダード

こどもサポーター（こころ支援）の研修スタンダードを次ページの表9に示した。全体を8領域に分け、それぞれの領域に12の講義題・項目例を示した。以下を参考にして、4領域以上にわたって8コマ（720分）の講義題目を設定して欲しい。

表9 「こどもサポーター」（こころ支援）」の研修スタンダード

領域	学習目的	講義題・項目	例
1. 指導者論	こどもサポーターは教師としてではなく、こどもをサポートする指導者としての役割が期待される。それはどういう指導者なのか、その指導者像をつかむ。	教育支援人材認証とは 教職論概説 指導者論 指導と指導者の権威 子どもの望む指導者像 援助者に求められる資質	ほめること叱ること 子どもを集団で指導する 子どもの保護者の理解 学校のカウンセラーとは サポートするとは 子どもに寄り添うとは
2. 子どもの理解	子どもの変化が激しくつかみにくなっている。今子どもたちはどうなっているのか、こどもを理解することによってサポーターとしての役割を理解できるようにする。	子どもの発達をとらえる 子どもの心の理解 子どもの権利と保護 孤立化する子どもたち 不登校と引きこもり 現在の子育て事情を学ぶ	子どもの自尊感情 子どもの回復力 (レジリエンス) 軽度発達障害の理解 学習意欲とつまづき 子どもの心の健康とは 子どもの社会的自立
3. 子どもを取り巻く環境の理解	少子化と核家族化といわれる中で、子どもを取り巻く環境がどのように変わってきているのか学び、子どものコミュニケーション能力を疎外しているものを理解する。	少子化社会の家族・地域 地域社会の変容と子ども 消費社会と遊びの変化 メディアの影響と子ども 国際化と多文化共生 コミュニケーション不全	ゲームと想像力 学習塾かスポーツか 早期教育と外国語教育の関係 自然の喪失と環境教育の役割 親子関係と友だち関係 いじめ、不登校と子ども関係
4. こどものこころの理解(背景の理解)	現代に生きるこども達がどのような環境におかれ、どのような悩みを抱えているのか理解する。またそうした悩みが子ども達の生活にどのように影響しているのか学ぶ。	子どもの発達と心の発達 幼児期の遊び体験と集団 自然体験が与える影響 少子化と親子関係性 反抗期をどう過ごしている 子どもの声を聞いてみると	競争社会と子どもの発達 自尊感情とアイデンティティ 親子関係と子どもの自立 メディア・リテラシーと子ども 就学前と不登校の関連性 食べることと心の発達の関係
5. 不登校(引きこもり)とは何か(実態の理解)	とりわけ不登校や引きこもりの実態とその状態にいる子どもたちはどのような課題をかかえているのか理解する。また不登校や引きこもりがどのような背景で表面化するのか理解する。	不登校のメカニズム いじめと不登校相関性は 虐待と不登校の関係性は 不登校の低位分類と評価学校管 理体制と不登校 広汎性発達障害と不登校	生育家庭と不登校の関り ことばの障がいと不登校 発達障がいと不登校の相関 適応障害、不安障害等 不登校と引きこもりを繋ぐもの 不登校と非行は関係するの
6. 不登校(引きこもり)への対応	不登校や引きこもりの状態に陥っているこども達に対して、どのように対応していくべきか学ぶ。 事例をもとにして具体的な対処の仕方を実践的に学び、方法のいくつかのノウハウを身につける。	専門機関との連携をとる コミュニケーション力を メンタルヘルスと受容 自然体験を通して創造力 第三者の関りと社会体験 人との適切な距離感づくり 居場所としての親の会	自分の生きがいを持つ 第三者との接点をどう作るか 受容の中から見えてくるもの 訪問診断・訪問指導 フリースクールと適応教室 ペアレントトレーニング 非言語的治療の方法と実際
7. 子どもに関する社会制度や法制度の理解	不登校や引きこもりの発達と成長を理解し保証するためには彼らを取りまく環境、とりわけ法制度を理解する必要がある。そのいくつかを学ぶ。	児童福祉法から学ぶ 児童虐待防止法 児童養護施設とは何か フリースクールと適応教室 スクールカウンセリング 子どもの権利条約とは	専門家の対応 学校ぐるみの取り組みと協力 ソーシャルワーカー スクールソーシャルワーカー 親の会とNPO
8. 「こどもサポーター(こころ支援)」における支援のありかた	こどもサポーターとして学校においてどのように関わっていくのか、その道筋を学ぶ。不登校への対応や卒業後への配慮など支援者としての可能性を学ぶ。	こどもサポーターの理念 支援者に求められるもの 支援者と指導者の違いは プライバシーの守秘義務 こどもの最善の利益とは	こころ支援者のネットワーク 不登校や引きこもりの療法 親(保護者)支援の手立て 長期的視野でのサポート 人間発達資源の形成

* 基本的には 60 分で 12 コマ (720 分) ですが、90 分を基本とする場合は上記 8 つの領域から必ず 4 つ以上を実施する。

3. 「こどもパートナー」認証の読み替え

「こどもパートナー」認証付与の4コマについては、以下の表10を参照として、「こどもサポーター」研修の中から4コマを学習すれば、読み替えることができる。なお、「こどもパートナー」の講義は60分を原則としているが、「こどもサポーター」の場合、90分を基本とする研修が多い。その場合、90分の講義3コマ（90分×3＝270分）で4コマ（60分×4＝240分）分として換算できるものとする。ただし、「1. 支援者とは」は必修扱いとする。

表10 こどもパートナーとこどもサポーターの読み替え

こどもパートナー	こどもサポーター（こころ支援）
1 支援者とは	1 指導者論
2 子ども理解	2 子どもの理解
3 子どもを取り巻く環境の理解	3 子どもを取り巻く環境の理解
4 子どもとの接し方	6 不登校ひきこもりへの対応 8 「こどもサポーター（こころ支援）」 における支援のありかた

1. 「こどもサポーター」（学校活動支援）研修の趣旨

公教育におけるいわゆる学校支援の内容としては、授業の補助から、登下校の見守りやクラブ活動の指導にいたるまで教育課程内外まで多岐にわたっている。昨今の教育をめぐる様々な改革や社会的変化の中でますます変貌していく公教育の場においては、かつては「こども」だった学生や社会人が、自らの経験した「公教育」理解のみに縛られることなく、それらの変化に対応した支援の在り方を求められている。

本研修においては、このような観点から、変貌していく現在の公教育の性質や在り方の理解を深めることで、今、公教育の場で必要とされている形の支援を考えつつ、幅広い内容にわたる学校支援活動において共通して求められる実践力を身につけることを企図する。

2. こどもサポーター（学校活動支援）の研修スタンダード

こどもサポーター（学校活動支援）の研修スタンダードを次ページの表 11 に示した。全体を 8 領域に分け、それぞれの領域に 12 前後の講義題・項目例を示した。多岐にわたる学校支援活動に必要な力を身につけるためにも、それぞれの領域から最低 1 つの項目をカバーすることが望ましい。

Ⅶ 「こどもサポーター」(学校活動支援) 研修の概要

表 11 「こどもサポーター」(学校活動支援) の研修スタンダード

領域	学習目的	講義題・項目	例
1. こども・教育支援者論	本認証制度の趣旨とともに、学校教育課程の内外におけるこども・教育支援者の役割についての理解を深める。	教育支援人材認証制度について 教育支援原論 ケアリングの教育学の基礎 教育思想・哲学の基礎 教育倫理学の基礎 保育思想の基礎	反省的实践とこども・教育支援 「叱らない子育て」と「褒め力」 支援における二つの区別 (「叱ると怒る」・「思いやり(ケア)と甘やかし」) こどもの権利と支援者の役割 多忙化する教師の支援と 教育支援人材育成の課題 「当事者学」の興隆と「教師の専門性」の現在
2. こども理解Ⅰ： 「こども」と 「おとな」	「おとな」と「こども」の連続性・不連続性について、こどもの「発達」および社会文化的背景から理解を深める。	こども理解の基礎 発達心理学の基礎 学年・学校種を軸にみた思春期の心理学 こども観の社会学 道徳判断の発達理論 こどもの活動観察(観察実習)	「こどもの発見」とその後 サイコ・パブルとこどもの心理 ピアジェ理論とその後 ジェンダーと発達心理 「こどもリテラシー」を高めよう ケータイ・インターネット時代のこども
3. こども理解Ⅱ： こども臨床の 基礎	主として学校や社会生活にストレートに適應できないこどもたちへの理解を深めるとともに、そのようなこどもの成長発達の支援のあり方について考える。	臨床教育学の基礎 カウンセリングマインド論・入門 スクールカウンセリング論・入門 学校ケースメソッド・鍵的場面 学校教育活動支援体験(実習) 逸脱の社会学・入門	小1プロブレムと中1ギャップ 不登校・ひきこもりのこどもたち 保健室から見るこどもの現在 いじめの構造 「友だち地獄」の中のこどもたち こどもの自尊感情(セルフ・エスティーム)を高めよう
4. 学校理解Ⅰ： 組織としての 学校の内部	組織としての学校内の秩序、公平性のあり方等に関する理解を深める。	教育法規・制度の基礎 学校の歴史と現在 教職の歴史と現在 学校教育改革の動向 教育課程の歴史と現在 学校危機管理入門	スクールハラスメントを防ぐために 学校安全・危機管理における 「支援」者の役割 学校事故に関する事例研究 応急手当の技術 学力観の変遷と学力テスト 感情労働としての教職
5. 学校理解Ⅱ： 社会の中の学校	学校が社会の中で果たしている役割を社会的に理解するとともに、様々な社会資源や施設と学校との連携のあり方についても理解を深める。	学校教育の社会学の基礎 放課後児童施策の歴史と現在 社会教育の基礎 ジェンダーと学校教育 スクール・ソーシャルワーク論・入門	学力・学歴と社会階層 ソーシャル・キャピタルと学校支援 学社連携・学社融合 「力のある学校」と地域社会 児童保育のこどもたち 学校化社会・再考
6. 変貌する家庭 と学校	いわゆる近代家族の枠組みで家族のあり方を理解するだけでなく、多様化していく家族のあり方についても理解を深める。	家族社会学の基礎 ポスト近代家族論・入門 児童福祉の基礎 家族心理学の基礎 家庭教育学の基礎 比較家族論・入門	こどもの貧困と虐待 母子家庭・父子家庭の支援 子育ての歴史 児童養護施設で育つこども 異文化を背景に持つこども メディア(絵本・ドラマ etc.)の中に見る 家族観
7. こどもの遊びと 集団の指導と 支援	こどもの集団のあり方について、遊びや組織活動に着目しながら理解するとともに、その指導と支援方法についての理解も深める。	こども支援活動体験(実習) クラブ部活動支援(実習) 手作りおもちゃ体験(実習) 「遊び」の社会学・入門 こどもグループダイナミクス・入門 おもちゃと遊びの歴史・現在	おもちゃ・テレビゲームとこども バルシューレ理論と実践に学ぶこどもの指導 こどものためのコーチングとメンタリング こどもの農業・飼育体験支援(実習) 学級崩壊から学ぶこども集団の現在 現代クラブ活動に見るこども
8. 「障害」のある こどもの支援と 特別支援教育	特別支援教育時代における学校支援に必要な基本的な障害理解、支援技術、法規、理念等について理解を深める。	特別支援教育に関する法規とその理念 発達障害のある子どもの理解とその支援法 身体に障害のある子どもの理解とその支援法 特別支援教育時代における教材・教育機器研究 特別支援学校・学級の現在	「障害者の権利条約」と特別支援教育 特別支援教育時代における「体育」 「特別支援教育は、『障害』児を特別扱いはするの？」 「増やされる障害児」と医療化する学校教育 世界のインクルーシブ教育 「医療的ケア」の必要なこどもの支援

3. 「こどもパートナー」認証の読み替え

「こどもパートナー」認証付与の4コマについては、以下の表12を参照として、「こどもサポーター」研修の中から4コマを学習すれば、読み替えることができる。なお、「こどもパートナー」の講義は60分を原則としているが、「こどもサポーター」の場合、90分を基本とする研修が多い。その場合、90分の講義3コマ(90分×3=270分)で4コマ(60分×4=240分)分として換算できるものとする。ただし、「1. 支援者とは」は必修扱いとする。

表12 「こどもパートナー」と「こどもサポーター(学校活動支援)」の読み替え

こどもパートナー	こどもサポーター(外国語活動)
1 支援者とは	1 こども・教育支援者論
2 子ども理解	2 こども理解Ⅰ:「こども」と「おとな」 3 こども理解Ⅱ:こども臨床の基礎
3 子どもを取り巻く環境の理解	4 学校理解Ⅰ:組織としての学校の内部 5 学校理解Ⅱ:社会の中の学校 6 変貌する家庭と学校
4 子どもとの接し方	6 こどもの遊びと集団の指導と支援 7 「障害」のあるこどもの支援と特別支援教育

1. 「こどもサポーター」(ゲストティーチャー) 研修の趣旨

小学校や中学校、高等学校等では、主に生活科や総合的な学習の時間、職業体験やキャリア教育等において、地域の人や専門家などが自らの仕事や経験、知識を子どもたちに伝える活動が数多く実践されています。しかし、経験や知識が乏しい子どもたちに専門的なことがらを伝えるのは決してたやすいことではありません。

本研修は、生活科や総合的な学習の時間を中心に様々な場面で、自らが従事している仕事や活動あるいは地域の様々なことをうまく伝えることのできる人材の育成を目指しています。

2. こどもサポーター (ゲストティーチャー) の研修スタンダード

こどもサポーター (ゲストティーチャー) の研修スタンダードを表 13 に示しました。全体を 8 領域に分け、それぞれの領域に具体的な講義題・項目例、取り組み方法を示しています。これらを参照して、5 領域以上にわたって 8 コマ (1 コマ 60 分) の講義題目を設定して欲しいものです。

表 13 こどもサポーター (ゲストティーチャー) の研修スタンダード

領域	学習目的	講義題・項目例	方法・資料
1. 新しい授業と支援者の役割	大人は自らが子どもの頃に体験した授業を元に授業等でのかかわり方をイメージする。ここでは、現在の学校教育が求めている子どもの主体性を重視したり、言語活動を取り入れたり、問題解決型の授業の考え方を理解し、その中で支援者としてどうかかわるかを学ぶ。	今日の学校教育に求められる授業とは 問題解決学習の考え方・進め方 子どもの主体性や学習意欲を重視した授業 支援者としてこどもの活動にどうかかわるか	過去の自らが受けていた授業に対する「黒板とチョークによる一方的な教授」という偏ったイメージを払拭するための資料や授業映像を準備したり、文部科学省が作成・配布している新学習指導要領の理解を求めた保護者向けのパンフレットを活用するのが望ましい。
2. 生活科や総合的な学習、キャリア教育の基礎	学校教育において、特に大人が持つ知識や経験等の伝達が必要とされている生活科や総合的な学習の時間及び職業体験、キャリア教育の考え方について理解する。	生活科の趣旨や目標、内容 総合的な学習の時間の趣旨や目標、内容 職業体験の趣旨や内容 キャリア教育の趣旨や内容 大人の知識や経験が必要とされる教育活動とは	生活科や総合的な学習の時間等の趣旨や内容について、文部科学省等の資料や生活科の教科書、総合的な学習や職業体験等の事例を通して具体的に理解する。
3. 生活科や総合的な学習、キャリア教育の実際と支援者の役割	学校教育において、特に大人が持つ知識や経験等の伝達が必要とされている生活科や総合的な学習の時間及び職業体験、キャリア教育の具体的な事例について理解すると共に、支援者としての適切な関わり方を考える。	生活科の活動と支援のかかわり方 総合的な学習の活動と支援のかかわり方 職業体験の活動と支援者のかかわり方 キャリア教育の活動とかかわり方	生活科や総合的な学習の時間等の具体的な活動及び支援者の適正な関わり方について理解するために、生活科の教科書や実際の授業記録、総合的な学習や職業体験等の実際の授業や活動記録の中から地域人材や専門家が関わっている事例を通して考える。
4. 子ども理解	子どもを取り巻く環境の変化や発達障害の多様性などにより「子ども理解」が困難になりつつある。子どもたちと関わる上で必要となる知識や情報を獲得する。	子ども理解の基礎とは 子どもの発達をどう捉えるか 幼児期理解の深化と拡大 現在の青少年の発達特性 子どもの心理理解	子どもとのかかわりにおける具体的な失敗事例から、子ども理解に関するどのような知識や情報の欠如が問題を生み出したのかを発達理論等をふまえて考える。
5. 効果的な伝え方・話術の基礎	子どもが興味を持って話を聞いたり作業をしたりできるように、専門的な知識や技能をうまく伝える方法について知る。	子どもを引きつける話術 (基礎編) 発達段階に応じた話し方 (基礎編) 分かりやすく伝える力 (基礎編) 子どもの反応を見ながら話す	説明だけにとどまらず、失敗事例を取り上げ、何が問題だったかを協議したり考えさせたりして具体的に考えさせる。
6. 効果的な伝え方・話術の実際	子どもが興味を持って話を聞いたり作業をしたりできるように、専門的な知識や技能をうまく伝える方法について、演習を通して理解する。また、子どもたちの質問にうまく答える手法を会得する。	子どもを引きつける話術 (応用編) 発達段階に応じた話し方 (応用編) 分かりやすく伝える力 (応用編) 粘り強く質問に答える術	失敗事例を取り上げ、何が問題だったかを協議したり考えさせたり、実際にお互いに説明を行って見て問題点を見つけ出したり、効果的な話し方を見出す演習を取り入れたい。
7. 資料やメディアの活用	話術だけでは不十分な場合がある。資料や分かりやすいプレゼンテーション、映像などを手軽に作成する方法を習得する。	効果的なプレゼンづくり 資料の作成と活用 映像の作成と活用	魅力的な配布資料やプレゼン、映像資料を紹介すると共に、それらの作成を実際に体験してもらう。
8. 教師との事前・事後の打ち合わせにおける支援のありかた	授業や活動の中で、支援者は何が求められているのか、どのようにかかわればよいのかについては学校や教師との事前の打ち合わせが必要であることへの理解とその方法について理解する。また、授業後におけるかかわり方についての評価・改善の必要性を知る。	学校との事前相談のあり方 教師との事前相談のあり方 事後における教師や学校へのフィードバック 事後におけるかかわり方の評価と改善	学校や教師との打ち合わせ事例を紹介し、教師役とゲストティーチャー役に分かれて、簡単な打ち合わせを体験する。

3. 「こどもパートナー」 認証の読み替え

「こどもパートナー」 認証付与の 4 コマについては、以下の表 14 を参照として、「こどもサポーター」(ゲストティーチャー) 研修の中から次の 4 コマ (4 領域) を学習すれば、読み替えることができる。

表 14 「こどもパートナー」と「こどもサポーター (ゲストティーチャー)」との読み替え

こどもパートナー	こどもサポーター (ゲストティーチャー)
1 支援者とは	1 新しい授業と支援者の役割
2 子ども理解	4 子ども理解
3 子どもを取り巻く環境の理解	2 生活科や総合的な学習、キャリア教育の基礎
4 子どもとの接し方	3 効果的な伝え方・話術の基礎

1. 「こどもパートナー」(読み聞かせ) 研修の概要

小学校の朝学習や放課後、また、中学校においても、絵本の読み聞かせのボランティア活動がさかんに行われている。また、子どもを持つ保護者自身も、我が子への読み聞かせをするために絵本への学びの需要が増えている。しかし、絵本について体系的に学ぶ機会が少ない状況である。

本研修では、絵本や読み聞かせについての知識を習得し、適切な読み聞かせの方法と技術とを身につけ、学校や地域において、読み聞かせができる人材を育成することを目的とする。

2. 「こどもパートナー」(読み聞かせ) の研修スタンダード

こどもサポーター(読み聞かせ)の研修スタンダードを次ページの表15に示した。全体を8領域に分け、それぞれの領域に12前後の講義題・項目例を示した。多岐にわたる学校支援活動に必要な力を身につけるためにも、それぞれの領域から最低1つの項目をカバーすることが望ましい。

表 15 「こどもサポーター」(読み聞かせ)の研修スタンダード

領域	学習目的	講義題・項目例	
1. 指導者論	こどもサポーターは教師としてではなく、子どもをサポートする役割が期待される。それは、どういう指導者なのか。指導者像をつかんで欲しい。	教職論概説 専門職論の系譜 権威の構造 子どもの望む指導者像 援助者に求められる資質 スクールコーディネーター論	ほめると叱るの間 子ども集団の指導 モンスターペアレント論 スクールカウンセラーの役割 サポートする心 子どもによりそう
2. 子どもの心の理解	「子ども理解」が困難になりつつある。本研修を契機として、自分なりの子ども像を築いて欲しい。	子ども理解の基礎 子どもの発達を捉える 子どもの心理理解 孤立化する子どもたち 青少年のひきこもり 現在の子育て事情	子どもの自尊感情 レジリエンスを培う 軽度発達障害のとらえ方 学習のつまずき メンタルヘルスのとらえ方 社会的自立とは何か
3. 絵本を取り巻く環境	絵本を取り巻く環境を学び、読み聞かせボランティアに求められるものを知る。	絵本の歴史 教育と絵本 こどもの発達と大人の関わり 読み聞かせボランティア誕生の背景 読み聞かせボランティアに求められるもの	
4. 絵本の理解 (1) 基本	子どもを取り巻く環境の変化や発達障害の多様性などにより「子ども理解」が困難になりつつある。子どもたちと関わる上で必要となる知識や情報を獲得する。	絵本の種類を知る。 日本の絵本 外国の絵本 日本の民話絵本・伝説絵本 知絵本と対象年齢	
5. 絵本の理解 (2) 発展	絵本の仕掛けを知る。	絵本のキャラクターのまるい大きな正面顔 画面構成 色彩 絵本モニタージュ 母親語	
6. 読み聞かせの方法	適切な読み聞かせの方法を知る。	こどもにとっての絵本の読み聞かせの魅力 絵本を楽しむ子どもの心理 個人と集団 読み聞かせの基本原則 アイコンタクト(視覚的共同注視) 声の届け方	音読の基本 絵本の選び方 こどもの引き込み方 効果的な演出方法
7. 読み聞かせの演習 (1) 基本	読みあい活動を通してスキルを磨く。	絵本の読みあい演習 声の届け方演習	
8. 読み聞かせの演習 (2) 発展	読み聞かせ活動を通してスキルを磨く。	こどもの引き込み方演習 効果的な演出方法の演習 こどもへの実践演習 読み聞かせのプログラムづくり	

3. 「こどもパートナー」認証の読み替え

「こどもパートナー」認証付与の4コマについては、表16を参照として、「こどもサポーター」研修の中から4コマを学習すれば、読み替えることができる。なお、こどもパートナーの講義は60分を原則としているが、こどもサポーターの場合、90分を基本とする研修が多い。その場合、90分の講義3コマ(90分×3=270分)で4コマ(60分×4=240分)分として換算できるものとする。ただし、「1 支援者とは」は必修扱いとする。

表16 こどもパートナーとこどもサポーター（読み聞かせ）との読み替え

こどもパートナー	こどもサポーター（読み聞かせ）
1 支援者とは	1 指導者論
2 子ども理解	2 子どもの心の理解
3 子どもを取り巻く環境の理解	3 絵本を取り巻く環境 4 絵本の理解（1） 5 絵本の理解（2）
4 子どもとの接し方	6 読み聞かせの方法 7 読み聞かせの演習（1） 8 読み聞かせの演習（2）

1. 「こどもサポーター」（世代間交流）研修の趣旨

日本においても世代間交流を積極的にすすめることが求められており、幼稚園や保育園、小学校などが地域の高齢者を招いて交流を行う様子が報じられている。「こどもサポーター」（世代間交流）は、こうした高齢者と子どもが触れ合う機会を持つときに、どのようにしたらお互いの交流がうまく行くのかアドバイスしたりサポートしたりすることが求められている。高齢者が持っている様々な知識や技術、マナーを、子ども達のエネルギーにどう融合させていくのか、その心と技術を身につける。

2. こどもサポーター（世代間交流）の研修スタンダード

こどもサポーター（世代間交流）の研修スタンダードを下記の表に示した。全体を8領域に分け、それぞれの領域に12の講義題・項目例を示した。以下を参考にして、4領域以上にわたって8コマ（720分）の講義題目を設定して欲しい。

表 17 「こどもサポーター」(世代間交流)の研修スタンダード

領域	学習目的	講義題・項目例
1. 指導者論	こどもサポーターは教師としてではなく、こどもをサポートする指導者としての役割が期待される。それはどういう指導者なのか、その指導者像をつかむ。	教育支援人材認証とは 教職論概説 指導者論 指導と指導者の権威 子どもの望む指導者像 援助者に求められる資質
2. 子どもの理解	子どもの変化が激しくつかみにくなっている。今子どもたちはどうなっているのか、こどもを理解することによってサポーターとしての役割を理解できるようにする。	子どもの発達をとらえる 子どもの心の理解 子どもの権利と保護 孤立化する子どもたち 不登校と引きこもり 現在の子育て事情を学ぶ
3. 子どもを取り巻く環境の理解	少子化時代といわれる中で、子どもを取り巻く環境がどのように変わってきているのか学び、子育て支援活動のサポートのポイントをつかむ。	少子化社会の家族・地域 地域社会の変容と子ども 消費社会と遊びの変化 メディアの影響と子ども 国際化と多文化共生 コミュニケーション不全
4. 大人や高齢者を取り巻く社会の理解(背景の理解)	かつては自然に世代間の交流が行なわれていた。それが文明の発達とともに希薄になり、出会うことも少なくなった状況や背景を学ぶ。	高齢化社会とは 孤立する大人・高齢者 人的資源としての高齢者 社会のリーダーシップと退職後の落差
5. 高齢者や子どものこころの理解(実態の理解)	現代に生きるこども達がどのような環境におかれ、どのような悩みを抱えているのか理解する。	子どもを幸せにするには 多くの大人たちが必要 子どもに係ることで育つ使命感 子どもに触れることで育つ生きがい
6. 世代間交流とは何か、その持つ意味	高齢者と若者世代の間に、意図的・継続的な、資源の交換と学習を作り出す社会的なシステムの必要性を理解する。	「一人の子どもを育てるには 一つの村がいる」 社会問題の解決
7. 世代間交流の実態について学ぶ	事例をもとにして具体的な対処の仕方を実践的に学び、方法のいくつかのノウハウを身につける。	高齢者施設と保育園 世代間交流センターとは 各自治体と世代間交流施策 世代間交流プログラム 世代間交流が高齢者の健康に与える効果は
8. 「こどもサポーター(世代間交流)」における支援のありかた	こどもサポーターとして学校においてどのように関わっていくのか、その道筋を学ぶ。	繋ぐとは 高齢者の願いを聞取る 子どもや親の願いを聞取る 心理的効果と身体的効果 高齢者ボランティア内容

* 基本的には 60 分で 12 コマ (720 分) ですが、90 分を基本とする場合は
上記 8 つの領域から必ず 4 つ以上を実施する。

3. 「こどもパートナー」認証の読み替え

「こどもパートナー」認証付与の4コマについては、以下の表を参照として、「こどもサポーター」研修の中から4コマを学習すれば、読み替えることができる。なお、「こどもパートナー」の講義は60分を原則としているが、「こどもサポーター」の場合、90分を基本とする研修が多い。その場合、90分の講義3コマ(90分×3=270分)で4コマ(60分×4=240分)分として換算できるものとする。ただし、「1. 支援者とは」は必修扱いとする。

表 18 こどもパートナーとこどもサポーター(世代間交流)との読み替え

こどもパートナー	こどもサポーター(世代間交流)
1 支援者とは	1. 指導者論 8. 「こどもサポーター」(世代間交流)における支援者の在り方
2 子ども理解	2. 子どもの理解
3 子どもを取り巻く環境の理解	3. 子どもを取り巻く環境の理解
4 子どもとの接し方	5. 高齢者や子どものこころの理解(実態の理解) 7. 世代間交流の実態について学ぶ

1. 「こどもサポーター」（子育て支援）研修の趣旨

子育て中の親にとって、親子の遊び場や交流の場、あるいはほっと落ち着ける場が必要である。また子育ての悩みは多岐にわたり、それが強くなりすぎると子どもへの虐待や自らの病気にもつながってしまうことも懸念される。本来は楽しいはずの子育てが苦しみになってしまうこともある。「こどもサポーター」（子育て支援）は、こうした親やその子ども達が、安心して生活ができるための支援を行えることを目指している。

子育て支援に関して見たい気持ちはあるが、何から始めていいかわからない方、子どもが好きでボランティアをやりたいがどうしたらいいかわからない方に、子どもの発達や親の悩みなど、必要な知識とかわり方の基本を身につけてもらうものである。

2. こどもサポーター（子育て支援）の研修スタンダード

「こどもサポーター」（子育て支援）の研修スタンダードを下記の表に示した。全体を8領域に分け、それぞれの領域に12の講義題・項目例を示した。以下を参考にして、4領域以上にわたって8コマ（720分）の講義題目を設定して欲しい。

XI 「こどもサポーター」(子育て支援) 研修の概要

表 19 「こどもサポーター」(子育て支援) の研修スタンダード

領域	学習目的	講義題・項目例
1. 指導者論	こどもサポーターは教師としてではなく、こどもをサポートする指導者としての役割が期待される。それはどういう指導者なのか、その指導者像をつかむ。	教育支援人材認証とは 教職論概説 指導者論 指導と指導者の権威 子どもの望む指導者像 援助者に求められる資質
2. 子どもの理解	子どもの変化が激しくつかみにくくなっている。今子どもたちはどうなっているのか、こどもを理解することによってサポーターとしての役割を理解できるようにする。	子どもの発達をとらえる 子どもの心の理解 子どもの権利と保護 孤立化する子どもたち 不登校と引きこもり 現在の子育て事情を学ぶ
3. 子どもを取り巻く環境の理解	少子化時代といわれる中で、子どもを取り巻く環境がどのようになってきているのか学び、子育て支援活動のサポートのポイントをつかむ。	少子化社会の家族・地域 地域社会の変容と子ども 消費社会と遊びの変化 メディアの影響と子ども 国際化と多文化共生 コミュニケーション不全
4. 乳幼児や子どもの発達の実態の理解	子ども、とりわけ乳幼児がどのように発達し、成長していくのか、何を大切にしなければならないのかを学ぶ。身体的発達と同時に心の発達について学ぶ。	月齢による発達段階 体の発達とコミュニケーション ことばの発達とコミュニケーション 人間関係の発達 乳幼児の健康 子どもにとっての食育
5. 乳幼児や子どもの遊びと文化の理解	子どもにとって遊びとは何か、どんな役割を果たしているのかを学ぶ。時代とともに変容していく遊びと文化について、何を大切にしなければならないのかを学ぶ。	子どもにとっての遊びとは 遊びが育てる人間の体 心の発達と集団あそび 絵本の読み聞かせ 伝承遊びと子どもの理解 遊びが育てる想像力
6. 子育て支援とは何か、その持つ意味	かつては多世代家族や地域の中で行なわれていた子育て支援が失われ、孤立する親にとって子育て支援の持つ意味を学ぶ。	育児不安と子育て支援 地域社会で支える子育て 世代間交流と子育て 「子育て支援」で学ぶこと 何を「支援」するのか 自立支援と児童養護
7. 子育て支援の実態についての理解	国や自治体は子育て支援について様々な取り組みをしているがその実態や各地で行なわれている子育て支援の取り組みについて学ぶ。	公的保育・子育て支援 子育て支援センターとは 自治体の子育て政策は今 子育て支援ネットワーク 保育カウンセリングとは 子育て支援事業の在り方
8. 「こどもサポーター」(子育て支援)における支援者のありかた	こどもサポーターにおいて支援者はどうあるべきか、どのように対応すべきかを学ぶ。また実際にどのように動くか実践などを踏まえて理解する。	子どもサポーターの理念 支援者に求められるもの 支援者と指導者の違いは 災害対応と子育て支援 支援と援助

* 基本的には 60 分で 12 コマ (720 分) ですが、90 分を基本とする場合は上記 8 つの領域から必ず 4 つ以上を実施する。

3. 「こどもパートナー」認証の読み替え

「こどもパートナー」認証付与の4コマについては、以下の表を参照として、「こどもサポーター」研修の中から4コマを学習すれば、読み替えることができる。なお、「こどもパートナー」の講義は60分を原則としているが、「こどもサポーター」の場合、90分を基本とする研修が多い。その場合、90分の講義3コマ(90分×3=270分)で4コマ(60分×4=240分)分として換算できるものとする。ただし、「1. 支援者とは」は必修扱いとする。

表 20 こどもパートナーとこどもサポーター(子育て支援)との読み替え

こどもパートナー	こどもサポーター(子育て支援)
1 支援者とは	1. 指導者論 8. 「こどもサポーター」(子育て支援)における支援者の在り方
2 子ども理解	2. 子どもの理解
3 子どもを取り巻く環境の理解	3. 子どもを取り巻く環境の理解
4 子どもとの接し方	5. 乳幼児や子どもの遊びと文化の理解 7. 子育て支援の実際についての理解



「教育支援人材の育成」を通し、教育基盤の強化に貢献する
一般社団法人

教育支援人材認証協会

Japan Association for Certifying and Training Educational Specialists

平成 25 年 4 月 1 日発行版

目次

- 1 基本的な視点
 - 1) こども支援士の位置
 - 2) 研修の性格
 - 3) 研修のユニット数
 - 4) 「こどもサポーター」との関連
 - 5) 社会人の認証と学生の認証
 - 6) 認証料と有効期限
 - 7) 備考
- 2 認証1 = 社会人対象の認証
 - 1) 研修の構成
 - 2) 講座の構成
 - 3) (1) 社会人対象の「こども支援士 - アフタースクール」の研修スタンダード
(2) 社会人対象の「こども支援士 - 学校教育支援」の研修スタンダード
 - 4) キャリアの基準
 - 5) 認証の条件
 - 6) その他
- 3 認証2 = 学生対象の認証
 - 1) 研修の構成
 - 2) 科目の認定
 - 3) 講座の構成
 - 4) (1) 学生対象の「こども支援士 - アフタースクール」の研修スタンダード
(2) 学生対象の「こども支援士 - 学校教育支援」の研修スタンダード
 - 5) 子ども支援実習
 - 6) 「こどもサポーター」資格との関係
 - 7) 学生対象の認証
 - 8) 短大などでの認証
- 4 書類審査による資格付与
 - 1) 本制度の趣旨
 - 2) 審査の基準
- 5 こども支援学会の設立
 - 1) 設置の趣旨
 - 2) 子ども支援学会の性格

補足資料 認証更新にあたっての基準

(研究開発委員会委員長・深谷昌志)

1 基本的な視点

1) こども支援士の位置

「こども支援士」の認証を「こどもパートナー」や「こどもサポーター」の上位の資格として位置つける。なお、当面の間、「こども支援士」として「こども支援士 - アフタースクール」と「こども支援士 学校教育支援」の2認証を設定する。

2) 研修の性格

「こども支援士」は上位の研修なので、受講者に子どもに関する専門的な情報を伝達することを指すが、それと同時に、受講生の自主的な学習を促進するような柔軟性のある研修計画の作成を配慮する。

3) 研修のユニット数

「こども支援士」の研修は30ユニットを基本とする。「60分の研修」を1ユニットと捉えるので、90分の講義は1.5ユニット、120分の講義は2ユニット扱いとなる。

4) 社会人の認証と学生の認証

こども支援士の研修対象として 社会人と 学生とが想定されるが、社会人は社会経験は豊富だが新しい情報に接する機会が少ない。それに対し、学生は学習する環境に身を置いているが子どもと接する経験に乏しい。したがって、社会人には講座の受講が、学生には子どもとのふれあいが重要になるので、研修計画の作成にあたり、両者の違いを明確にする必要が生じる。

上述の観点から、社会人と学生とで認証の形態が異なる。「社会人対象の研修(認証1)」は「講座の受講+ キャリアの査定」から構成されるが、「学生対象の研修(認証2)」は「講座の受講+ 子ども支援実習」の組み合わせとする。

5) 「こどもサポーター」との関連

「社会人対象の研修(認証1)」にあたって、「キャリアの査定」を必要とするが、「こどもサポーター」資格取得者は「こども支援士」認証講座を受講できるものとする。

6) 認証料と有効期限

こども支援士の認証は、各主催者が法人の委嘱を受けて行なうこととする。なお、各主催者は研修実施にあたり、研修計画を法人に提出し、事前審査を受けることとする。また、研修終了後、研修の概要を法人に報告し、法人の審査を受けることとする。なお、認証にかかる費用は認証審査料と認証料を含めて、以下のように設定する。費用は社会人研修と学生研修とで異なる。

認証にかかる費用

	認証審査料	認証料	全体
社会人対象	2.000 円	8.000 円	10.000 円
学生対象	1.000 円	4.000 円	5.000 円

学生の認証は、在学期間は「こども支援士(学生)」とし、卒業後、「こども支援士」に切り替わるが、その際の更新料は2.000円とする。

こども支援士の認証の有効期間は5年間とする。なお、資格更新にあたり、更新の基準を細則に定めてあるので、キャリアに応じて、自分の獲得ポイントを計算し、更新手続き

を進めて欲しい。

7) 備考

今回の提案はこども支援士制度策定の第一次案であって、今後、具体的な研修の成果や社会的な評価などを勘案しつつ、より精度の高い制度作りを目指すことにする。

2 認証1 = 社会人対象の認証

1) 研修の構成

社会人対象の研修は「講座の受講」と「キャリアの査定」から構成される。「講座」は「オリエンテーション」、「講義」と「演習(ゼミ)」、「課題研究」を要素とする。

2) 講座の構成

オリエンテーション = 2 ユニット

「こども支援士」受講生には、子ども問題に関心を寄せている者が多いので、「オリエンテーション」などを通して、認証協会の現状などを説明すると同時に受講生相互の交流などに心がけて欲しい。なお、オリエンテーションは開講のオリエンテーションと修了式のそれぞれ1ユニットを基本とする。

講義 = 6 講義 × 2 ユニット = 12 ユニット

「講義」は90分の講義(1.5ユニット)と30分の質疑応答(0.5ユニット)を加え、120分(2ユニット)を基準とする。したがって、1講義は2ユニットとなる。そして、講義は4カテゴリーから各1講義以上、合計6講義・12ユニット分の履修を求める。なお、「指導者論」を必修とする。また、60分(1ユニット)の講義を組むことは可能だが、その場合は、講義数は12となる。

演習 = 4 演習 × 3 ユニット = 12 ユニット

「演習」は180分を単位とするので、3ユニット分となる。すべてのカテゴリーから1演習、12ユニットの履修を求める。なお、「演習」では、資料をもとに受講生と話し合いを重ねる、あるいは、専門的な技法の基礎を伝達する、そして、実技的な活動を理論的に深めるなど、多様な形態を工夫して欲しい。

課題研究 = 1 課題研究 × 4 ユニット = 4 ユニット

「課題研究」は240分を使うので4ユニット分となる。なお、「課題研究」では、あらかじめ、受講生に課題を与え、レポートの提出を求める。レポートを素材として、講師の指導のもとに学習を進める形態を基準とする。なお、課題研究ではレポートの内容と学習を評価し、その結果を認証の条件とする。また、課題研究に6ユニットを使うことも可能だが、その際は講義や演習のユニットを削減することとする。

ユニットの組み合わせ

こども支援士の認証は30ユニットが基準となるが、ユニットの組み合わせなどについては主催団体の自主性を認める。

3)(1) 社会人対象の「こども支援士 - アフタースクール」の研修スタンダード

社会人を対象とする「こども支援士 - アフタースクルー」の研修スタンダードを示すと、以下の通りとなる。

「こども支援士 - アフタースクール」(社会人)の研修スタンダード

カテゴリー	領域	ユニット	領域の分類	目的	研修題目例
1	オリエンテーション	2	オリエンテーション。(修了式も1ユニット)	アフタースクールの理念を伝達すると同時に、受講生相互の交流を深める機会を設定する。	オリエンテーション (こども支援士の説明や受講生の自己紹介) 修了式
2 講義 (各カテゴリーを含めて、6領域を選択) 6講時 12ユニット 指導者論は必修	1) 指導者論	2	指導者論	アフタースクールの指導者と教員との違いを明らかにしながら、指導者論を深める。	理想の指導者とは 子どもにとっての教師 専門職論の構造
		2	アフタースクール論	アフタースクールの理念を提示すると同時に、現状の問題点とその克服策を概説する。	アフタースクールの理念 海外のアフタースクール アフタースクールの課題
	2) 子ども理解	2	子ども理解	子どもは変容するだけに、子どもに関する最新の研究成果をふまえて子ども論を伝達する。	子ども理解を深める 子ども研究の現在 子どもの国際比較
		2	子ども臨床の基礎	アフタースクールに多様な子どもが訪れるだけに、子ども臨床の基礎の習得が必要になる。	ADHDの理解 LD研究の現在 特別支援教育の課題
	3) 子どもの環境	2	変容する家族と地域	変容する家族や地域の状況を正確に理解し、共感を持って対応できる態度の育成を目指す。	少子化社会の子育て 生活空間としての地域 いじめへの理解と深める
		2	学校教育の課題	学校教育の系譜を探ると同時に、現在の学校の抱える課題についての理解を深める。	岐路に立つ学校教育 学力論争の底流を探る 諸外国の学校改革に学ぶ
	4) 子どもの接し方	2	子どもの接し方	子どもと接するには専門的な理解や技法が求められるので、そうした基礎を伝達したい。	集団指導の基礎と実践 自主性と規律との間 自尊感情を育てる
		2	遊び集団の理解と指導	現在の子どもは群れ遊びの体験を持っていない。群れ遊びの楽しさを具体的に伝えたい。	群れ遊びのノウハウ 伝統遊びの復権 遊びを育てるクラフト
3 演習 4演習 12	1) 指導者論	3	指導者論演習	指導者の果たす役割について、理念を求めつつ、資料を素材としながら、話し合いを重ねる。	教師の教育実践に学ぶ 「今を生きる」合評 教師研究の事例解説
	2) 子ども	3	子ども理解演	子ども理解を具体的な教材を媒介に深めていく。講師との話	子ども理解の文献講読 不登校の事例研究

ユ ニ ッ ト	理解		習	し合いを大事にして欲しい。	児童臨床の基礎
	3) 子どもの環境	3	子どもの環境演習	家族や地域の変容の理解を、具体的な教材を手がかりとしながら深めていきたい。	ケータイ時代の子どもの地域の教育計画の精査 新書版の指定教材講読
	4) 子どもの接し方	3	子どもの接し方演習	子どもの接し方が我流に流れやすいので、子ども理解の基礎を学んで欲しい。	サイコドラマ実習 傾聴を究める 人間関係ゲームの展開
4 課題研究 4 ユニ ッ ト	アフター スクールの研究	4	アフタースクールに関連した「課題研究」	テーマを決めて、受講生から事前にレポートを提出してもらおう。 レポートを素材として、講師を中心に話し合いを持つ。	課題研究のテーマとして、研修の申し込み時に、具体的な課題を提示して欲しい。 例) サポーターの課題 アフタースクールへ提言

(2) 社会人を対象とする「こども支援士 学校教育支援」の研修スタンダードを示すと、以下の通りとなる。

「こども支援士 - 学校教育支援」(社会人)の研修スタンダード

カテゴリー	領域	ユ ニ ッ ト	領域の分類	目的	研修題目例
1	オリエンテーション	2	オリエンテーション。(修了式も1ユニット)	「学校支援」の理念を伝達すると同時に、受講生相互の交流を深める機会を設定する。	オリエンテーション (こども支援士の説明や受講生の自己紹介) 修了式
2 講義 (各カテゴリーを含めて、6領域を選択) 6講時 12 ユニ	1) 指導者論	2	指導者論	学校支援の指導者と教員との違いを明らかにしながら、指導者論を深める。	理想の指導者とは 子どもの求める教師像 子ども支援者の役割
			教師論の周辺	教師については多くの先見が蓄積されている。そうした知見の一端を学習してもらう	教職理解を深める 子どもの望む教師像 専門職論の構造
	2) 子ども理解	2	子ども理解	子どもは変容するだけに、子どもに関する最新の研究成果をふまえて子ども論を伝達する。	子ども理解を深める 子ども研究の現在 子どもの国際比較
			子ども臨床の基礎	特別支援を求める子どもが増加している。子ども臨床の基礎的な情報を講義する。	ADHD の理解 LD の基本理解 特別支援教育を考える
3)	2		学校教育の系譜を探ると同時	岐路に立つ学校教育	

ニット 指導者 論は必 修	子 ど も の 環 境	2	学校教育の課 題	に、現在の学校の抱える課題に ついての理解を深める。	学力論争の底流を探る 諸外国の学校改革に学ぶ
		2	変容する家族 と地域	変容する家族や地域の状況を 正確に理解し、共感を持って対 応できる態度の育成を目指す。	少子化社会の教育問題 生活空間としての地域 いじめ問題への理解
	4) 子 ど も の 接 し 方	2	学校の中の子 ども	学校の子どもは学級の中で多 くの時間を過ごす。学級を中心 に学校中の子どもを理解する。	学級指導の基礎 集団指導の基礎と実践 自主性と規律との間
		2	子どもの接し 方	子どもと接するには専門的な 理解や技法が求められるので、 そうした基礎を伝達する。	自尊感情を育てる 子どものほめ方・しかり方 学級内の地位と役割
3 演習 4演習 1 2 ユ ニ ット	1) 指 導 者 論	3	指導者論演習	指導者の果たす役割について、 理念を求めつつ、資料を素材と しながら、話し合いを重ねる。	教師の教育実践に学ぶ 文学に見る教師像 子ども時代の恩師を語る
	2) 子 ど も 理 解	3	子ども理解演 習	子ども理解を具体的な教材を 媒介にして深めていく。	「窓際のトットちゃん」講読 リジエンスを学ぶ 新書版の指定教材の講読
	3) 子 ど も の 環 境	3	子どもの環境 演習	学校を取り巻く家族や地域の 変容を、具体的な教材を手がかり としながら深めていく。	学歴社会の構造 ユビキタス社会とは 親性とは何か
	4) 子 ど も の 接 し 方	3	子どもの接し 方演習	子どもの接し方を、子ども理解 の方法を絡めて、習得していく ことを目指す。	サイコドラマの体験 傾聴を究める 人間関係ゲームの展開
4 課 題 研 究 4ユ ニ ット	学 校 教 育 支 援 の 研 究	4	学校教育支援 に関連した「課 題研究」を	共通のテーマを決めて、受講 生から事前にレポートを提出 してもらう。 レポートを素材として、講師 を中心に話し合いを持つ。	課題研究のテーマとして、研 修の申し込み時に、具体的な 課題を提示して欲しい。 例) 「理想の教師像とは」 「子ども時代の学校生活」

4) キャリアの基準

「キャリア」の判定は書類審査を原則とするが、「こどもサポーター」認証の取得者は書類の提出を免除する。したがって、「こどもサポーター」認証を受けていない者は、子どもの支援に関するキャリアの提出が必要となる。そして、「キャリアが不足(または、「なし」)」と判定された者は、キャリア面での条件を充たした後に、資格を取得できるものとする。

なお、キャリア判定については、以下の ~ を「キャリアがある」と判定する基準としたいが、キャリアには多様さが予想されるので、柔軟に読み替えを考えたい。

(1) 職業的・活動的なキャリア

小中学校、幼稚園、保育所、学童保育、児童施設などで1年以上の勤務経験がある者(非常勤を含む)

子どもを対象とするカウンセラーやソーシャル・ワーカーなどの職歴が1年以上ある者
アフタースクールやプレーパークなどで週1回程度の指導を2年以上経験した者（ボランティアを含む）

学校の指導員などを週1回程度、2年以上経験した者（ボランティアを含む）

社会体育やけいこ事などで、週1回程度の指導を2年以上経験した者

PTAの学校役員などを2年以上経験した者

大学や公的機関の主催する研修会を6回程度以上、講習した者など。

子どもに関係していなくとも、自分なりの個性と思えるキャリアがあれば、それを申請することも可能である。

例 ボランティア活動への定期的な参加、英語の資格取得、スポーツ大会への参加、美術展の入選、音楽会への出演など。

（2）資格的なキャリアをもとに

教員や保育士など、実習を伴う教育的な免許を取得した者

臨床心理士、スクールカウンセラーなど、公的な臨床心理的な資格を取得した者

社会福祉士など、児童福祉関係の資格を取得した者

大学、短大（専修学校）の教育学部、子ども学部、家政学部などで、子どもに関する講義を20単位以上履修した者

（注）本人の自己申告を尊重するが、疑問を感じられる事例については、資料の提出を求めることとする。

5) 認証の条件

受講生が、以下の条件を充たした場合、こども支援士の認証を得ることができる。

30 ユニットを受講した者

なお、1研修の受講が29ユニット以下の場合、欠席した科目と同領域の研修を次回以降に受講し、30ユニットに達した時点で、認証を得られることとする。その際、受講料は徴収しない。

「課題研究」のレポートを提出し、主催団体から「合」の評価を得た者

注）評価は主催団体に委ねる。

主宰団体が独自に演習などの学習を評価し、研修の条件に設定することも可能である。

主催団体は と（そして ）をもとに認証を行なうが、上記の資料を法人に送付し、報告すること。

6) その他

主催団体の裁量の余地

こども支援士の場合、多様な形態が予想されるので、基本的な構想をふまえて上で、ユニットの組み合わせなどについて、可能な限り、主催団体の裁量の余地を認める。

受講料への配慮

支援士の場合、研修のユニット数が多い上に、少人数の演習や課題研究なども設定されている。そのため、受講料が高額になる可能性が予測される。受講料については主宰団体の配慮や工夫を期待したい。

当面の研修計画

こども支援士が軌道になるまでの間、社会人対象の研修については、法人が主導して、

モデルプラン的な研修を実施する。また、法人が大学や行政などと連携して研修を開催する形態などを試行し、社会的な理解を得る努力を重ねる必要がある。

3 認証2 = 学生対象の認証

1) 研修の構成

学生対象の「こども支援士」の研修は「30ユニットの講座」と「子ども支援実習」とから構成される。大学では90分を単位とする授業が行われている場合が多いから、1講義が1.5ユニットとなり、本研修の30ユニットは20講時分に当たる。したがって、大学で研修を実施する場合、「通年科目(30週、90分授業なら45ユニット分)」なら「子ども支援実習」分を加えてもユニット数に余裕が生まれる。しかし、「半期科目(15週、22.5ユニット)」の講義では補講が必要な上に実習が加わるので、負担が重くなると考えられる。したがって、学生の研修では、通年科目での資格取得が原則となる。なお、学生の場合、子ども支援実習が重要になるが、実習については、5)を参照して欲しい。

2) 科目の認定

大学でこども支援士の認証を計画する場合、こども支援関係の科目が設置されている学部と設置されていない学部とで対応が異なる。

「こども支援関係の科目が設定されている」学部の場合 = こども支援士のための科目を新設するのが望ましいが、既設の科目の活用も可能である。

既設科目を活用する場合、二つの形態が考えられる。

(1) 1科目型 = 通年4単位の1科目で研修を完結させる形

(2) 連携型 = 基幹科目を設定し、他の科目と連携させ、2科目以上で研修を行う形

なお、科目の指定にあたり、シラバス上に学習内容が具体的に記載されていることが必要となる。

「こども支援関係の科目が設置されていない学部」の場合 = こども支援士専用の講義を開設するか、他学部が開設されている場合は、その講義を受講する形となる。

3) 講座の構成

講座は以下のような構成となる。大学の講義は90分単位で組まれているので、1.5ユニットが基本となる。

オリエンテーション = 2講時・3ユニット

講義 = 8講義 × 1.5ユニット = 12ユニット

演習 = 4演習 × 3ユニット = 12ユニット

事前・事後指導 = 2講時・3ユニット

なお、講義では「指導者論」を必修とし、その他は各領域から1項目以上7項目を選択し、計8項目を講義する。の演習は講義的な授業を避け、学生の主体的な学習を大事にしたい。2講時を連続して1演習とし、4演習を行う。4領域から1項目ずつを選ぶのが望ましい。他にオリエンテーションと事前・事後指導が加わる。

4)(1) 学生対象の「こども支援士 - アフタースクール」の研修スタンダード

学生を対象とする「こども支援士 - アフタースクール」の研修スタンダードを示すと、以下の通りとなる。

「こども支援士 - アフタースクール」(学生)の研修スタンダード

カテゴリー	領域	領域の分類	目的	シラバス上の記載
1	オリエンテーション	オリエンテーションと修了式。各1ユニット	オリエンテーションでは子ども支援士の趣旨を説明する。修了式では、こども支援士資格の今後の活用についても説明して欲しい。	オリエンテーション 終了式
2	1) 保育者論	指導者論	アフタースクールの指導者と教員との違いを明らかにしながら、指導者論を深める。	理想の指導者とは 子どもにとっての教師 専門職論の構造
		アフタースクール論	アフタースクールの理念を提示すると同時に、現状の問題点とその克服策を概説する。	アフタースクールの理念 海外のアフタースクール アフタースクールの課題
	2) 子ども理解	子ども理解	子どもは変容するだけに、子どもに関する最新の研究成果をふまえて子ども論を伝達する。	子ども理解を深める 子ども研究の現在 子ども観の変遷
		子ども臨床の基礎	アフタースクールに多様な子どもが訪れるだけに、子ども臨床の基礎の習得が必要になる。	ADHDの理解 LDの基礎理解 特別支援教育を考える
	3) 子ども環境	変容する家族と地域	変容する家族や地域の状況を正確に理解し、共感を持って対応できる態度の育成を目指す。	少子化社会の子育て 生活空間としての地域 いじめへの理解と深める
		学校教育の課題	学校教育の系譜を探ると同時に、現在の学校の抱える課題についての理解を深める。	岐路に立つ学校教育 学力論争の底流を探る 諸外国の学校改革に学ぶ
	4) 子どもの接し方	子どもの接し方	子どもと接するには専門的な理解や技法が求められるので、そうした基礎を伝達したい。	集団指導の基礎と実践 自主性と規律との間 自尊感情を育てる
		遊び集団の理解と指導	現在の子どもは群れ遊びの体験を持っていない。群れ遊びの楽しさを具体的に伝えたい。	群れ遊びのノウハウ 伝統遊びの復権 遊びを育てるクラフト
3 演習 (2講)	1) 指導者論	指導者論演習	保育者の果たす役割について、理念を求めつつ、資料を素材としながら、話し合いを重ねる。	教師の教育実践に学ぶ 子ども支援者とは 教師研究の事例解説
	2) 子		子ども理解を教材を使いなが	子ども理解の文献講読

時を連続して、講義でない4演習)12ユニット分	子ども理解	子ども理解演習	ら深めていく。講師との話し合いを大事にして欲しい。	レジリエンスを学ぶ 子どもの深層心理入門
	3)子どもの環境	子どもの環境演習	家族や地域の変容の理解を、具体的な教材を手がかりとしながら深めていきたい。	ケータイ文化を考える 親性を深める 遊びの意味を深める
	4)子どもの接し方	子どもの接し方演習	子どもの接し方が我流に流れやすいので、子ども理解の基礎を学んで欲しい。	エンカウンターの基本 傾聴を究める 人間関係ゲームの展開
4 事前事後指導 2講時 3ユニット	事前事後指導	事前事後指導	アフタースクールを中心とした子ども支援実習についての事前指導と事後指導を実施する。	事前事後指導については6)を参照して欲しい

(2) 学生対象の「こども支援士 - 学校教育支援」の研修スタンダード

学生を対象とする「こども支援士 - 学校教育支援」の研修スタンダードを示すと、以下の通りとなる。

「こども支援士 - 学校教育支援」(学生)の研修スタンダード

カテゴリー	領域	領域の分類	目的	シラバス上の記載
1 オリエンテーション・2講時 3ユニット	オリエンテーション	オリエンテーションと修了式。各1ユニット	オリエンテーションでは子ども支援士の趣旨を説明する。修了式では、こども支援士資格の今後の活用についても説明して欲しい。	オリエンテーション 終了式
2 講義 ('指導者論'は	1) 保育者論	指導者論	学校支援の指導者と教員との違いを明らかにしながら、指導者論を深める。	理想の指導者とは 支援士と教師の間 子どもを支援すること
		教師論の周辺	教師については多くの先見が蓄積されている。そうした知見の一端を学習してもらう	教職理解を深める 子どもの望む教師像 専門職論の構造
	2) 子ども	子ども理解	子どもは変容するだけに、子どもに関する最新の研究成果を	子ども理解を深める 子ども研究の現在

必修。 各領域 から、1 項目以 上) 合計 8講時 12ユ ニット 分	も 理 解		ふまえて子ども論を伝達する。	子どもの国際比較
		子ども臨床の 基礎	特別支援を求める子どもが増 加している。それだけに、子ど も臨床の基礎の習得が必	ADHD の理解 LD 理解を深める 特別支援教育を考える
	3) 子 ども の 環 境	学校教育の課 題	学校教育の系譜を探ると同時 に、現在の学校の抱える課題に ついての理解を深める。	岐路に立つ学校教育 学力論争の底流を探る 諸外国の学校改革に学ぶ
		変容する家族 と地域	変容する家族や地域の状況を 正確に理解し、共感を持って対 応できる態度の育成を目指す。	少子化社会の教育問題 生活空間としての地域 いじめ問題への理解
4) 子 ども の 接 し 方	学校の中の子 ども	学校の子どもは学級の中で多 くの時間を過ごす。学級を中心 に学校中の子どもを理解する。	学級指導の基礎 集団指導の基礎と実践 自主性と規律との間	
	子どもの接し 方	子どもと接するには専門的な 理解や技法が求められるので、 そうした基礎を伝達したい。	自尊感情を育てる 子どものほめ方・叱り方 学級内の地位と役割	
3 演習 (2講 時を連 続し て、講 義でな い4演 習)12 ユニッ ト分	1) 保 育 者 論	指導者論演習	指導者の果たす役割について、 理念を求めつつ、資料を素材と しながら、話し合いを重ねる。	教師の教育実践に学ぶ 文学に見る教師像 子ども時代の恩師を語る
	2) 子 ども 理 解	子ども理解演 習	子ども理解を具体的な教材を 使いながら深めていく。	「窓際のトットちゃん」講読 シュタイナー教育を学ぶ 新書版の指定教材講読
	3) 子 どもの 環 境	子どもの環境 演習	学校を取り巻く家族や地域の 変容を、具体的な教材を手がかり にして深めていく	学歴社会の背景 ユビキタス社会とは 育った家庭を見直す
	4) 子 どもの 接 し 方	子どもの接し 方演習	子どもの接し方が我流に流れ やすいので、子ども理解の基礎 を学んで欲しい。	サイコドラマの体験 傾聴を究める 人間関係ゲームの展開
4 事前 事後 指導 2講時 3ユニ ット	事 前 事 後 指 導	事前事後指導	アフタースクールを中心とし た子ども支援実習についての 事前指導と事後指導を実施す る。	事前事後指導については6) を参照して欲しい

5) 子ども支援実習

(1) 子ども支援実習の性格

学生は子どもと接する経験に乏しいので、こども支援士の認証にあたって、子ども理解

を深める機会として、子ども支援実習を設定した。特に、学生の場合、こども支援士に求められる講義は通念の1科目で済むので、子ども支援認証の特色の一つとして、こども支援実習を重視したいと考えている。

(2) 実習期間の軽減処置

実習については、子ども関係の他の実習を履修しているかにより、実習の期間が異なる。

A群 = 学内で子どもに関連した他の実習 小中学校や幼稚園教諭の教育実習、保育士実習など、子どもに関連した実習 の履修者は子ども支援実習を軽減し、6ユニットとする。

1日に3時間実習をした場合は3ユニットになるので、実習は2日程度の長さとなる。

B群 = 実習を体験していない群の実習は15ユニットとする。1日3時間(3ユニット)の実習を設定すると、実習は5日程度で終了する。

群	条件	実習時間
A群	教育実習の経験者 (実習6ユニット)	1.5時×4回 =6時間
B群	教育実習の未経験者 (実習15ユニット)	1.5時×10回 =15時間

(3) こども支援実習の実習先

こども支援実習の実習先としては、原則として、教育実習や保育士実習などの実習先を避けることとする。したがって、こども支援にふさわしい実習先として、アフタースクールの認証の場合、放課後子ども教室や学童保育、プレーパーク、子どもの社会体育、学校教育支援の認証の場合、児童養護施設、適応指導教室、発達援助機関などが考えられる。

(4) 実習先の確保

子ども支援演習の場として、(3)でふれた場などが実習先と考えられる。しかし、学部により、そうした場との接点を持たない場合、法人が実習先を紹介することも可能である。また、本法人のパスポートクラブ制を活用することも推奨したい。

(5) 事前・事後指導の必要性

子ども支援実習にあたっては、実習に参加するための事前指導と実習後に行う事後指導から構成される。なお、事前事後指導の形態としては、通常の授業の中で、実習や事前・事後指導を行う型、授業とは別に、本講座専用の短期の研修プログラムを設定し、それに事前事後指導を加える形が考えられる。

6) 「こどもサポーター」資格との関係

「こども支援士」資格は「こどもサポーター」資格の取得を前提としている。したがって、大学での「こども支援士」資格取得には、「こども支援士」講座の前段階として、支援士講座とは別に「こどもサポーター」講座を開講する。こどもサポーター研修に相当する科目を指定し、その受講をもって、こどもサポーター認証に代えるの2つのタイプが考えられる。

7) 学生対象の認証

(1) 認証の条件

認証にあたり、主催大学は法人に受講学生についての資料を提出することとする。法人

は大学から提出された資料に基づき、認証作業をおこなう。

学生の場合、大学の単位であるので、各大学での通常の評価に準じるが、社会人の認証では 30 ユニットの履修を原則としている。したがって、社会人の認証とのバランスを保つため、以下の条件を配慮して欲しい。

30 ユニットの内、27 ユニット以上の講座の出席した者

各大学の学習評価基準を充たしている者

注) 評価は主宰団体に委ねる。

大学が独自に認証の条件を設定することも可能である。

(2) 認証取得の時期

支援士は社会人を対象とする認証なので、学生の場合、在学時に講義を受け、実習を経て、研修を終了することができるが、認証は卒業後に有効となることとする。ただし、在学期間中に資格の活用を望む学生が多いと思われるので、学生期間限定の「こども支援士(学生)」の形での認証を行う。

なお、「こども支援士(学生)」は、卒業時に「こども支援士」の認証に切り替えることとするが、認証書き換えにあたっては再申請(申請料は 2000 円)が必要である。この場合、認証の有効期間は卒業後 5 年とする。

(3) 聴講生などの認証

該当科目を聴講生が受講し、こども支援士の申請を行う時は、各大学での認証の条件を充たすとともに、社会人認証と同じに「キャリア」面での資料を添付することとする。

9) 短大などでの認証

こども支援士は大学卒業を前提とする資格である。したがって、短大での学生の認証について「こども準支援士」の扱いとする。短大在籍中に認証を求める場合は、「こども準支援士(学生)」とし、卒業時に「こども準支援士」を取得するものとする。この場合、認証書き換えにあたっては再申請(申請料は 2000 円)が必要である。

なお、「準支援士」の資格を取得後、2 年を経過した者はこの間の活動記録を添えて、「こども支援士」の申請(申請料は 2000 円)をし、支援士の資格を取得できることとする。

また、短大が社会人を対象とする研修を実施する際は、修了生は「こども支援士」の資格を取得できることとする。

専門学校(専修学校)での認証については短大に準じるが、開催にあたって、当該校についての書類審査を行なうのを原則とする。

4 書類審査による資格付与

1) 本制度の趣旨

平成 25 年度からこども支援士の認証講座が開始された。しかし、こども支援士についての社会的な認知が進んでいない状況にある。そこで、こども支援士の社会的な認知を広めると同時に、こども支援士の指導者層の確保を目的として、こども支援活動の指導者層を対象として書類申請による認証を行なう。なお、申請にあたっては、一定の基準を設定し、その基準を超えることを認証の条件とする

2) 認証の類型

こども支援士の認証講座として「こども支援士—アフタースクール」と「こども支援士

「学校教育支援」の2タイプが実施されている。そうした実態をふまえ、書類による認証にあたっては、「アフタースクール」と「学校教育支援」の2タイプの認証に対応することとする。なお、申請者は希望する認証のタイプを記入し申請することになるが、2タイプのいずれか、あるいは、両者を申請することができる。

3) 認証の基準

書類での認証にあたっては、申請者のキャリアの応じた認証の基準を設定し、その基準に従って、認証することとする。認証の基準については細則を定める。

4) 認証の有効期限

講座での認証と同じに5年間とする。

5) 書類による認証の実施期間

書類による認証はこども支援士が定着するまでの暫定的な処置として5年間実施する。その後の対応については、その時点で検討することとする。

6) 資格審査委員会

書類による認証を実施するために資格審査委員会を設置し、同委員会が認証の審査を行なう。

5 こども支援学会の設立

1) 設置の趣旨

こども支援を推進するためには、研究者や実践家、行政や企業の担当者など、異業種・他分野の人々が集い、情報を交換し、処方箋を描くことが重要となる。そうした場を提供する目的で、こども支援学会の設立を考えた。こども支援学会は、従来の学会の持つ研究重視の姿勢を保持しながら、こども支援の実践との連携を重視し、開かれた学会としての性格も求めていきたい。

なお、こども支援士の認証に関連させると、「こども支援士」の認証はこども支援の出発点であって、認証取得後、その人なりに研修に努め、優れた「支援士」に成長することが望ましい。それだけに、支援士たちが集まり、互いに体験を語り合い、切磋琢磨する機会を設定することが必要となる。そうした目的も兼ねて、こども支援の輪を広げ、社会的にこども支援を促進する母体として「こども支援学会」を設立することとする。

2) こども支援学会の性格

こども支援学会では、こども支援についての最新の情報を提供すると同時に、支援士の体験発表や親睦の機会としての役割を果たすことも期待したい。なお、学会の運営にあたっては、自由と平等を土台に、研究の自由や真摯な討議などを尊重する伝統的な学会の持つよさを継承していきたい。それと同時に、誰でも自由に発言でき、仲間意識を抱け、参加が楽しみを共有できるような開かれた学会作りを目指したい。

3) 会員の条件

こども支援士の認証取得が入会の条件になるが、こども支援の活動をしている教育や福祉などの関係者の参加を考えている。なお、こどもサポーター資格取得者も準会員として入会を歓迎する。

補足資料 認証更新にあたっての基準

1 更新の種類

こども支援士の認証講座として「こども支援士－アフタースクール」と「こども支援士－学校教育支援」の2タイプが実施されている。認証更新にあっても、「アフタースクール」と「学校教育支援」の2タイプの認証に対応することとする。なお、2タイプの認証を受けている者は、どちらかを選択して、更新を受けることとする。

2 申請者のキャリアの種類

更新にあたり、申請者のキャリアに対応して、研究者系、実践家系、その他の3種類を設定する。申請者は申請の際、類型ごとの書式に従って、キャリア(*1)を記載し、審査を受けるものとする。

*1 = 職歴や学歴、活動歴は別として、研究・活動記録は前回の認証から5年間を対象とする。

3 更新のキャリア別の基準

種類によるキャリアの違いが大きいため、更新にあたって、種類を1)研究者系、2)実践家系、3)その他に分けるが、表中の基準に従って10ポイント以上が更新の基準となる。

1) 研究者系 = 主として、大学などに勤務する研究者

別表1の基準で10ポイント以上を更新の基準とする。

別表1 研究者系のキャリアの基準

12ポイント	単著
6ポイント	編著(編者名が4名以内の場合) 学会などの査読者のいる論文
4ポイント	著作の分担執筆、 学会などでの研究発表など(パネリストなどを含めて) 公的な場での作品の発表や実演など
3ポイント	雑誌などの論考、 大学や研究所などの紀要 (単著は3ポイント、共著は2ポイント) 行政などでの専門委員(任期は問わない) 研究所やNPOなどの役員など(3年以上) 子どもの活動プログラムの企画・主催・運営など
2ポイント	子ども支援学会・大会への参加 公的な研究会などでの講師など 子ども活動プログラムに定期的に参加など(3年以上)

2) 実践家系 = 主として学校の教員や保育士、また、プレーパークの指導員など

(1) 教員・保育職系

別表 2 の基準で 10 ポイント以上を更新の基準とする。

別表 2 教員系のキャリアの基準

X ポイント	<p>(勤務校以外の)地域での子どものスポーツや遊びなどの指導、特別支援などの活動</p> <p>年数をポイントに換算する。1年=1ポイント、最大10ポイント</p> <p>勤務校で、地域の社会体育や子ども支援活動への関与</p> <p>年数をポイントに換算する。1年=1ポイント、最大10ポイント</p>
4 ポイント	<p>著作の分担執筆、(単著は12ポイント)</p> <p>学会などでの発表など(パネリストなどを含めて)</p> <p>公的な場での作品の発表や実演など</p>
3 ポイント	<p>雑誌などに子ども支援関係の執筆</p> <p>大学や研究所などの紀要</p> <p>(単著は3ポイント、共著は2ポイント)</p> <p>上位の行政機関の専門委員(任期は問わない)(2委員会は6ポイント)</p> <p>研究所やNPOなどの役員など(3年以上)</p> <p>子どもの活動プログラムの企画・主催・運営など</p>
2 ポイント	<p>こども支援学会・大会への参加</p> <p>公的な研究会で子ども支援関係の発表</p> <p>地域の教育委員会などの子ども支援関係の委員会委員</p>

(2) 実践家系

別表 3 の基準で 10 ポイント以上を更新の基準とする。

別表 3 実践家系のキャリアの基準

X ポイント	<p>地域での子ども支援活動</p> <p>年数をポイントに換算する。1年=1ポイント、最大10ポイント</p> <p>スクールサポーターや補助員などの学校教育支援活動</p> <p>年数をポイントに換算する。1年=1ポイント、最大10ポイント</p>
4 ポイント	<p>著作の分担執筆、(単著は12ポイント)</p> <p>学会などでの発表など(パネリストなどを含めて)</p> <p>公的な場での作品の発表や実演など</p>
3 ポイント	<p>雑誌などに子ども支援関係の執筆</p> <p>大学や研究所などの紀要</p> <p>(単著は3ポイント、共著は2ポイント)</p> <p>上位の行政機関の専門委員(任期は問わない)(2委員会は6ポイント)</p> <p>研究所やNPOなどの役員など(3年以上)</p> <p>子どもの活動プログラムの企画・主催・運営など</p>
2 ポイント	<p>こども支援学会・大会への参加</p> <p>公的な研究会で子ども支援関係の発表</p> <p>地域の教育委員会などの子ども支援関係の委員会委員</p>

3) その他 = 研究者や実践家には属さないが、子ども支援に係わる多様なキャリアの持主
 (1) 行政者系 (*1.2)

*1 = 企業に勤務し、子ども支援に係わる者を含む。

*2 = 教育委員会だけでなく、児童相談所や学童支援センターなども含む。

別表4の基準で10ポイント以上を更新の基準とする。

別表4 行政系のキャリアの基準

Xポイント	地域での子ども支援についての行政的な支援体制作り 年数をポイントに換算する。1年=2ポイント、最大10ポイント 学校教育支援についての行政的な支援体制作り 年数をポイントに換算する。1年=2ポイント、最大10ポイント (行政の場合、同一職にいる期間が短いと思われるので、年2ポイント)
4ポイント	著作の分担執筆、(単著は12ポイント) 学会などでの発表など(パネリストなどを含めて) 公的な場での作品の発表や実演など
3ポイント	雑誌などに子ども支援関係の執筆 大学や研究所などの紀要 (単著は3ポイント、共著は2ポイント) 上位の行政機関の専門委員(任期は問わない)(2委員会は6ポイント) 研究所やNPOなどの役員など(3年以上) 子どもの活動プログラムの企画・主催・運営など
2ポイント	こども支援学会・大会への参加 (勤務地以外の地域での)子ども支援的な大会でのパネリストなど 公的な研究会などでの子ども支援関係の講演・提言など

(2) その他 = 独自の形で子ども支援を行なっている者(*1)や教育以外の側面から子ども支援を行なっている者(*2)など。

*1 = 例えば、音楽や美術の指導、あるいは、自然観察や星の観察などで子ども支援を行なっている者、キャンプの指導者などが考えられる。玩具の製作、海外キャンプの運営なども子ども支援活動として考える。

*2 = 医師や看護師などで、子ども支援に係わっている者、議員として地域の子どもの支援を進展させてきた者なども考えられる。

別表5の基準で10ポイント以上を更新の基準とする。

別表5 行政系のキャリアの基準

Xポイント	芸術や体育などで、子ども支援活動をしてきた年数(資料添付) 年数をポイントに換算する。1年=1ポイント、最大10ポイント その他の領域で、子ども支援活動をしてきた年数(資料添付) 年数をポイントに換算する。1年=1ポイント、最大10ポイント
4ポイント	著作の分担執筆、(単著は12ポイント)

	学会などでの発表など（パネリストなどを含めて） 公的な場での作品の発表や実演など
3 ポイント	雑誌などに子ども支援関係の執筆 大学や研究所などの紀要 （単著は3ポイント、共著は2ポイント） 行政機関の専門委員（任期は問わない）（2委員会は6ポイント） 研究所やNPOなどの役員など（3年以上） 子どもの活動プログラムの企画・主催・運営など
2 ポイント	こども支援学会・大会への参加 子ども支援的な大会での演者、パネリストなど 公的な研究会などでの子ども支援関係の講演やパネリストなど

4 認証の有効期限

講座での認証と同じに5年間とする。